

社会福祉施設での若者への福祉教育に関する アンケート調査報告書

2018年

若者への福祉教育研究会



赤い羽根共同募金の助成を受けています。

目 次

○ 調査の概要	2
○ 主な調査結果と考察	3
○ 回答者の属性①(施設の種別)	4
○ 昨年度の受入状況(受入している施設数)	4
○ 施設内の受け入れ体制(担当者の人数)	5
○ プログラム内容	6～
・小学生の施設訪問: 高齢者関係施設・身体障害者関係施設・知的障害者関係施設 精神障害者関係施設・児童福祉関係施設<除保育所>	
・中学生の職場体験: 高齢者関係施設・身体障害者関係施設・知的障害者関係施設 精神障害者関係施設・児童福祉関係施設<除保育所>	
・高校生の職業体験: 高齢者関係施設・身体障害者関係施設・知的障害者関係施設 精神障害者関係施設・児童福祉関係施設<除保育所>	
・介護等体験 : 高齢者関係施設・身体障害者関係施設・知的障害者関係施設 精神障害者関係施設・児童福祉関係施設<除保育所>	
○ プログラムで伝えている内容	18～
・小学生の施設訪問: 高齢者関係施設・身体障害者関係施設・知的障害者関係施設 精神障害者関係施設・児童福祉関係施設<除保育所>	
・中学生の職場体験: 高齢者関係施設・身体障害者関係施設・知的障害者関係施設 精神障害者関係施設・児童福祉関係施設<除保育所>	
・高校生の職業体験: 高齢者関係施設・身体障害者関係施設・知的障害者関係施設 精神障害者関係施設・児童福祉関係施設<除保育所>	
・介護等体験 : 高齢者関係施設・身体障害者関係施設・知的障害者関係施設 精神障害者関係施設・児童福祉関係施設<除保育所>	
○ 体験後の生徒・学生から施設への関わり	30
○ 利用利用者の有する力や尊厳について伝えるために工夫していること	31
○ 施設として受け入れする上で課題と感じていること	35
○ 今後、若者を受け入れるに際して取り組んでみたいこと	45

社会福祉施設での若者への福祉教育に関するアンケート調査結果

調査主体：若者への福祉教育研究会

日本福祉教育・ボランティア学習学会

協力：埼玉県社会福祉協議会

調査の概要

調査目的	社会福祉施設における若者への福祉教育の実態を把握し、その結果を実践現場へフィードバックすることにより、社会福祉施設との協働による福祉教育に寄与し、さらには次代の社会福祉を担う人材の養成に資する
調査対象	埼玉県内の社会福祉法人 386法人 回答のあった法人数 113法人 回収部数 178件
調査方法	郵送アンケート調査（調査期間 2018年8月）
倫理的配慮	依頼文において、本調査は匿名回答とし、得られたデータは研究目的のみに使用し、結果については学会等で報告することの同意を得て回答いただいた。
調査主体	日本福祉教育・ボランティア学習学会 課題別研究グループ 若者への福祉教育研究会
調査協力	埼玉県社会福祉協議会

主な調査結果と考察

○今回の調査では、高齢者関係施設と知的障害者関係施設の回答が多く、身体障害者関係施設、精神障害者関係施設、児童福祉関係施設（保育所を除く）の回答が少なかったため、本報告書では、高齢者関係施設と知的障害者関係施設の結果を中心としてまとめており、その他の施設の調査結果は参考として掲載しています。

【主な結果】

- 多くの施設では、受け入れに際して、施設についての説明を行い、利用者とのコミュニケーションや一緒に作業を行うプログラムを行っていました。また、感想や質問を職員と話し合う時間を設けている施設も多くなっていました。このように多くの施設では、利用者との直接的な交流と振り返りの機会を設けられています。
- 小学生の施設訪問、中学生の職場体験、高校生の職業体験、大学生の介護等体験の受け入れプログラムの違いでは、受け入れる子ども・若者の年齢が上がるにつれて、利用者の尊厳や人権を伝える施設が増えています。また、利用者への介助や介護についても含めるところが増えています。
- 施設種別の違いでは、高齢者関係施設では、利用者と一緒に食事をするのは少なく、それに比べて知的障害者関係施設では、利用者と一緒に食事をするものが多くなっていました。
- 受け入れに際しての課題として、マナー・態度に関するものが多く、その他、受け入れ体制や受け入れプログラムに関するものが多くありました。

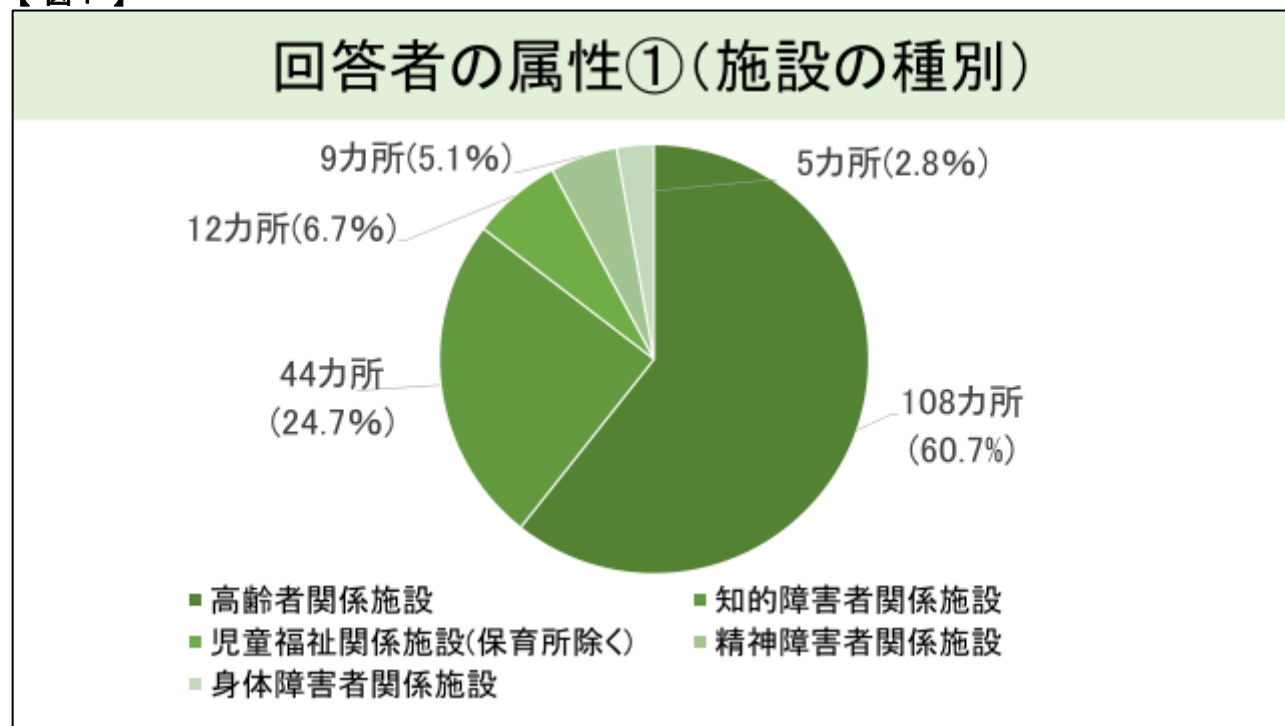
【考察】

- 受け入れプログラムの多くは、施設概要の説明、利用者との交流、職員との振り返りが中心となっており、また利用者の尊厳や人権を伝えることを大事にしています。一方で、社会福祉の理念や、介護・福祉の仕事の意義等を伝えている施設は少なく、こうした内容を伝えていけるプログラムの開発・工夫を考えていきたいと思います。
- 態度・マナーについては、教育機関における事前学習が重要であり、事後学習も含めて、施設と教育機関の連携が重要となります。
- 介護等体験は他のプログラムと異なり、将来教員になった時、どのようなことを子ども達に伝えたいと思うかという点での振り返りが重要となります。受け入れ施設においては、学生がこうしたことを考えていくために必要なプログラムを考えていくことが求められます。
- 今後、限られた期間での受け入れプログラムを充実させていくためには、各施設での工夫や実践事例を共有できる事例集の開発も重要な課題です。

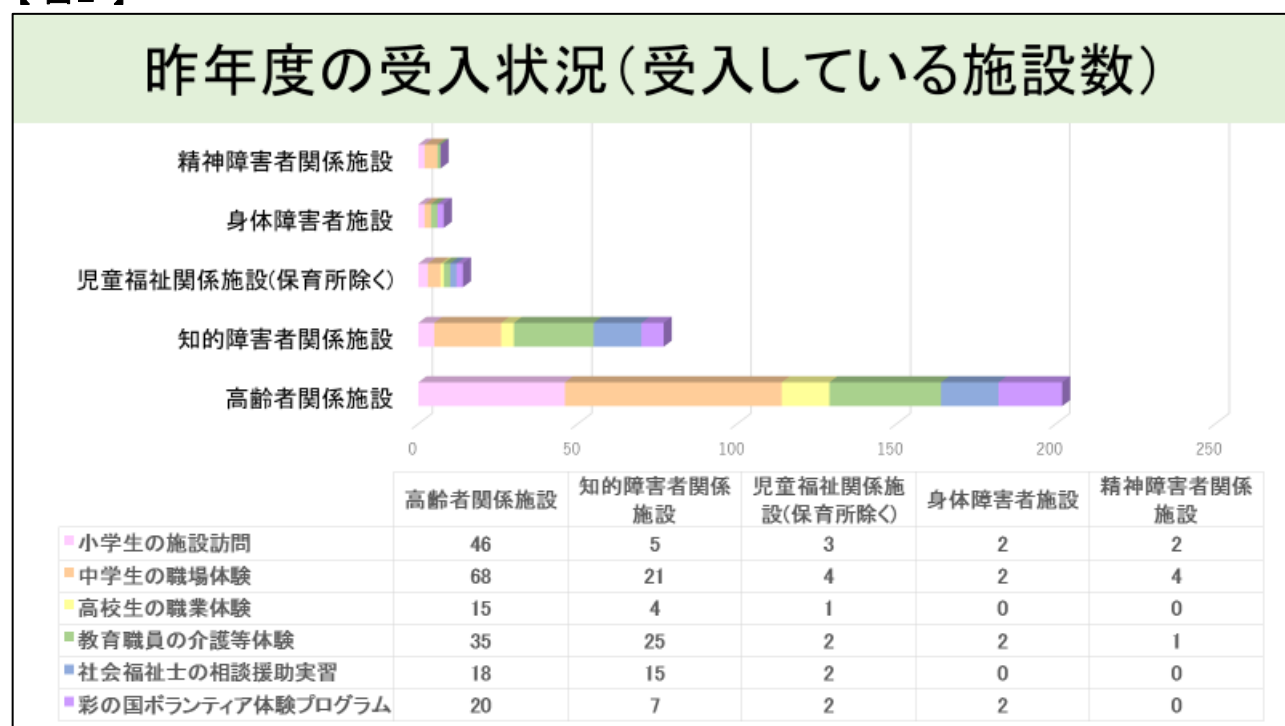
今回の調査は、社会福祉法人ごとでなく、1つの法人に複数の施設がある場合は、施設ごとにご回答いただきました。ご協力いただいた施設は、高齢者関係施設 108 カ所、知的障害者施設 44 カ所、児童福祉関係施設 12 カ所、精神障害者関係施設 9 カ所、身体障害者関係施設 5 カ所でした。(図 1)

それぞれの施設種別における 2017 年度の受け入れ状況は、図 2 の通りです。

【 図 1 】

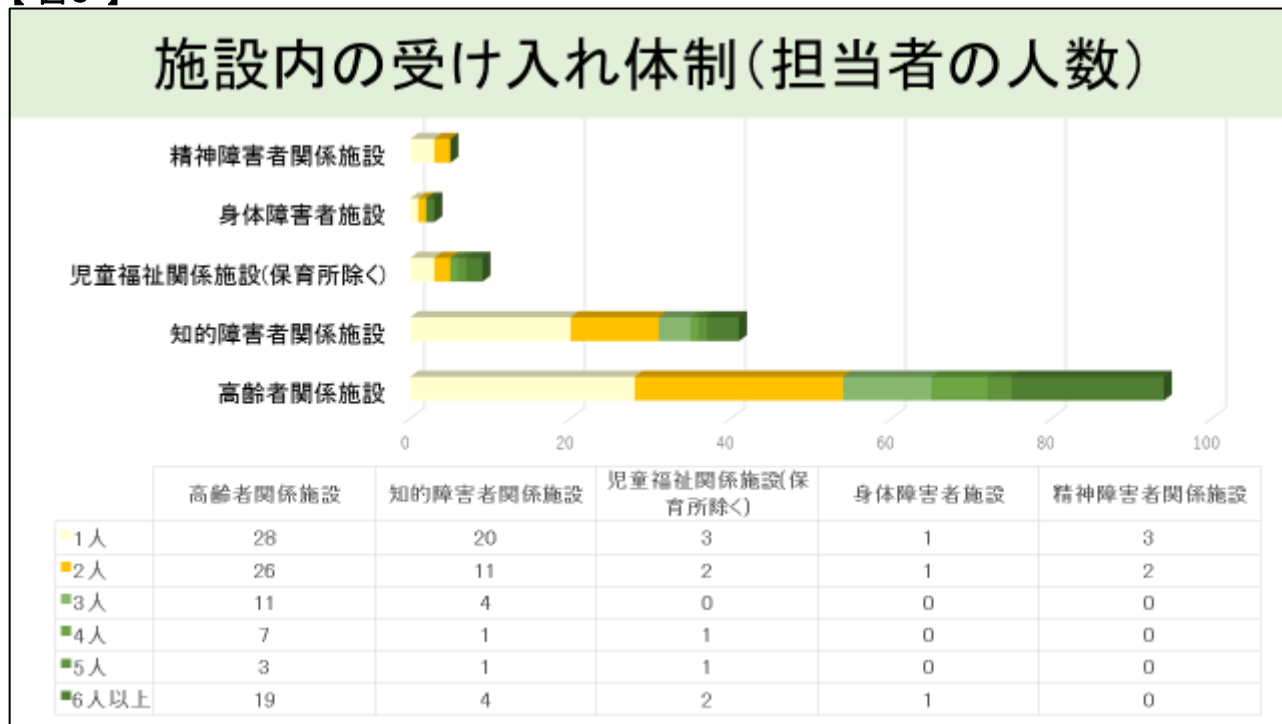


【 図 2 】



受け入れ体制について、担当者が1名というところが多く、中には2名以上配置している施設もありました。1名で担当している場合には、施設内における引き継ぎの問題が生じてくることが考えられます。(図3)

【 図 3 】



【小学生の施設訪問プログラムの内容について】

今回の調査では、高齢者関係施設と知的障害者関係施設の回答が多く、一方で児童福祉関係施設（保育所を除く）、身体障害者関係施設、精神障害者関係施設の回答が少ないため、分析と考察は、高齢者関係施設と知的障害者関係施設を対象とします。その他の施設については、参考にご覧ください。

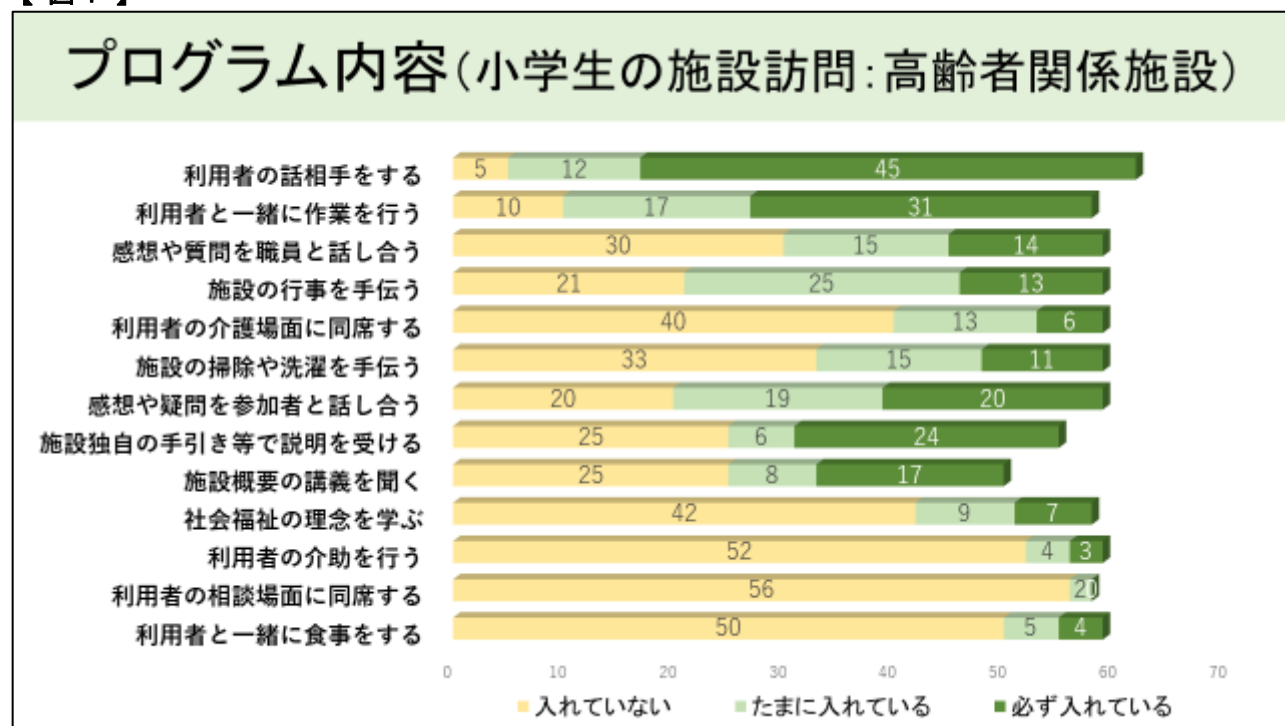
小学生を対象としたプログラムとして「必ず入れている」が最も多かったのは、高齢者関係施設では「利用者の話相手をする」、知的障害者関係施設では「感想や質問を職員と話し合う」でした。また知的障害者関係施設では「利用者の話相手をする」、「施設独自の手引き等で説明を受ける」が次いで多くなっていますが、高齢者関係施設では、「利用者と一緒に作業を行う」が次いで多くなっていました。

「利用者と一緒に食事をする」については、高齢者関係施設ではとても少ない一方で、知的障害者関係施設では半数以上が「必ず入れている」と回答されていました。

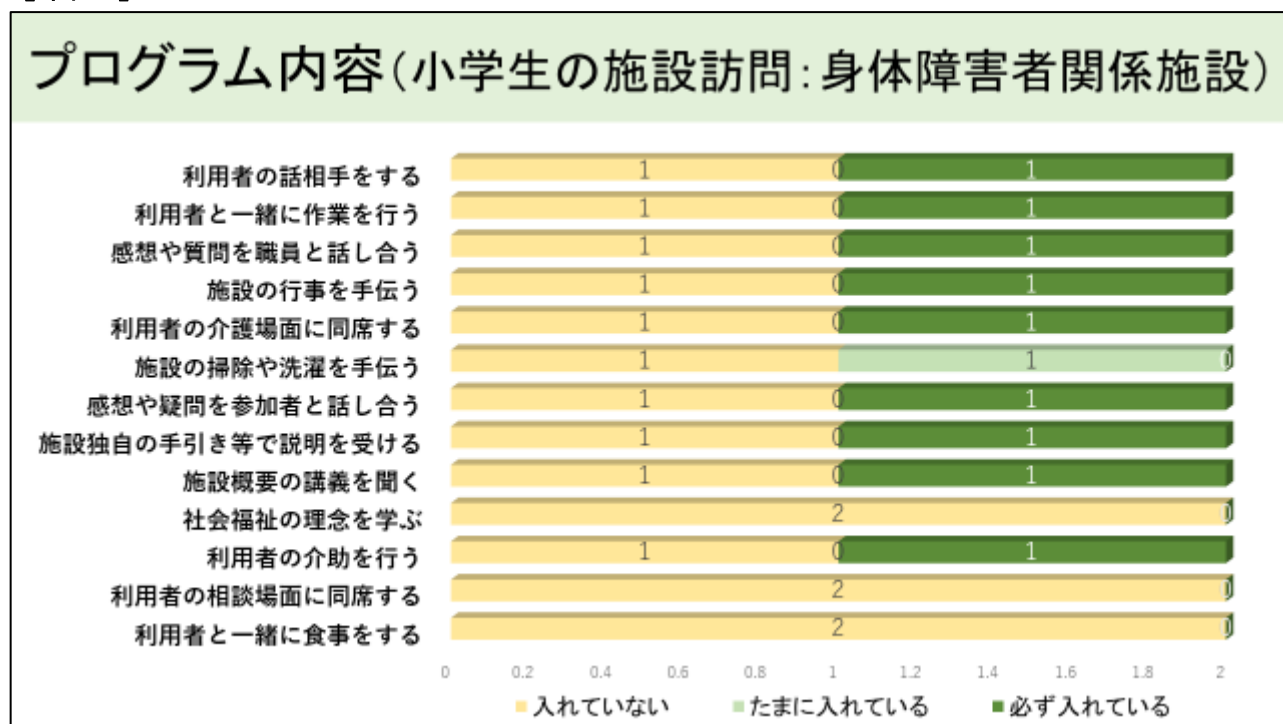
また、高齢者関係施設では「感想や質問を職員と話し合う」は「入っていない」施設も多く、このように施設種別による受け入れプログラムの違いが見られました。

（図4、図5、図6、図7、図8）

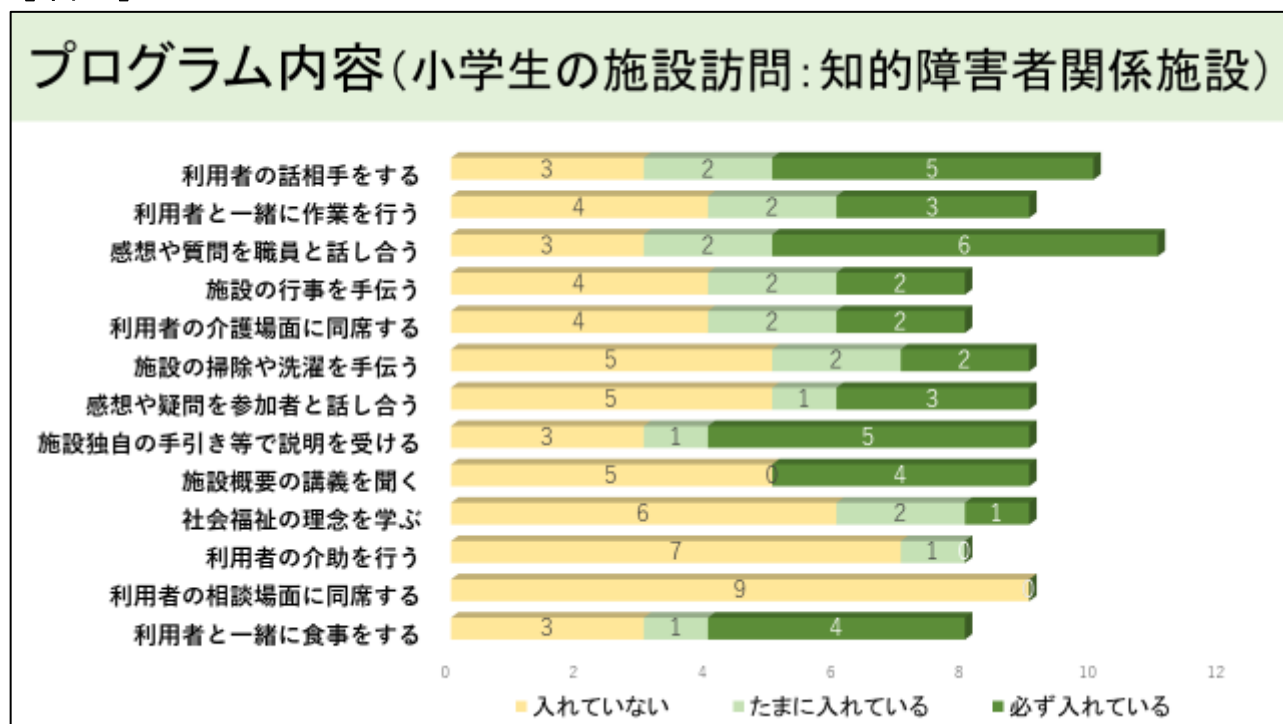
【図4】



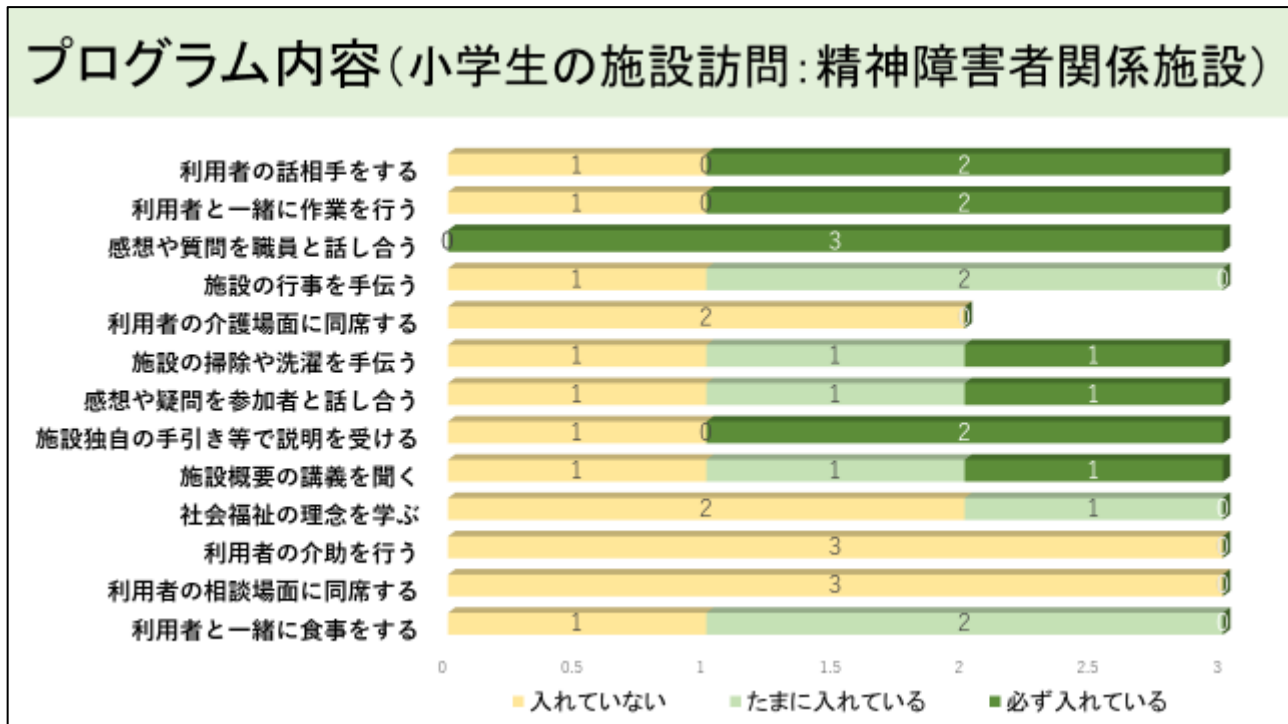
【 図5 】



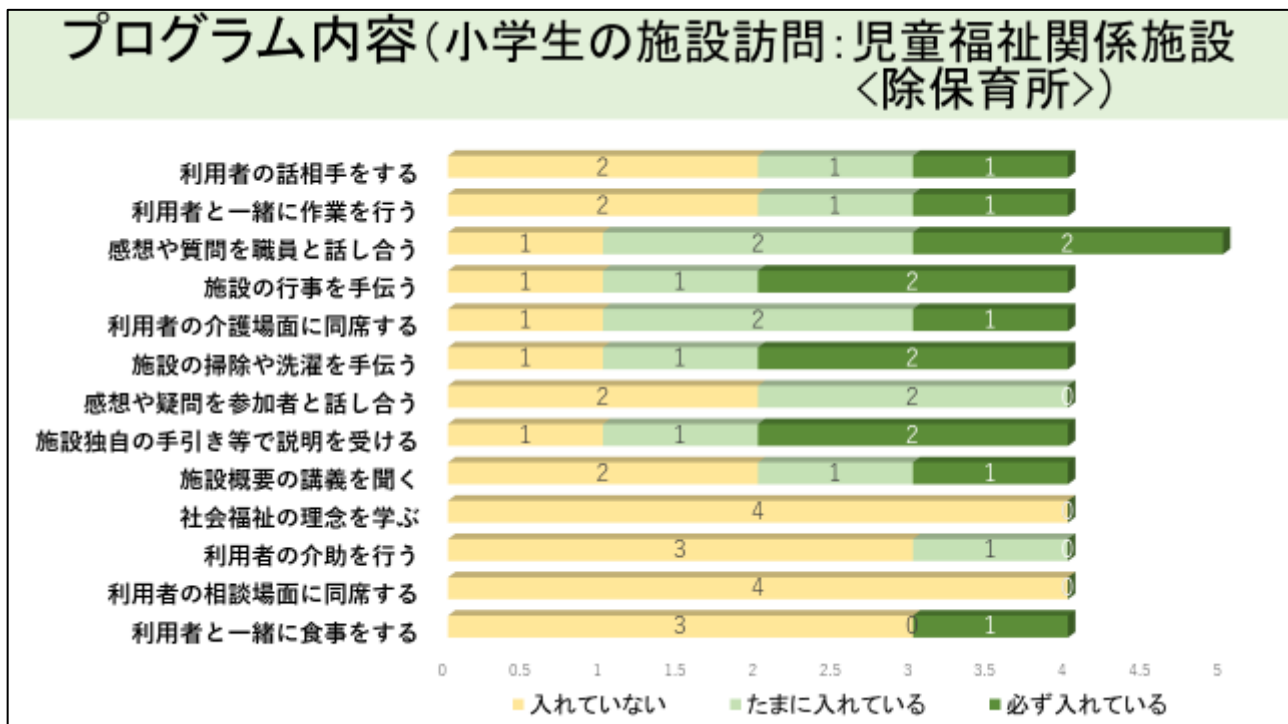
【 図6 】



【 図 7 】



【 図 8 】

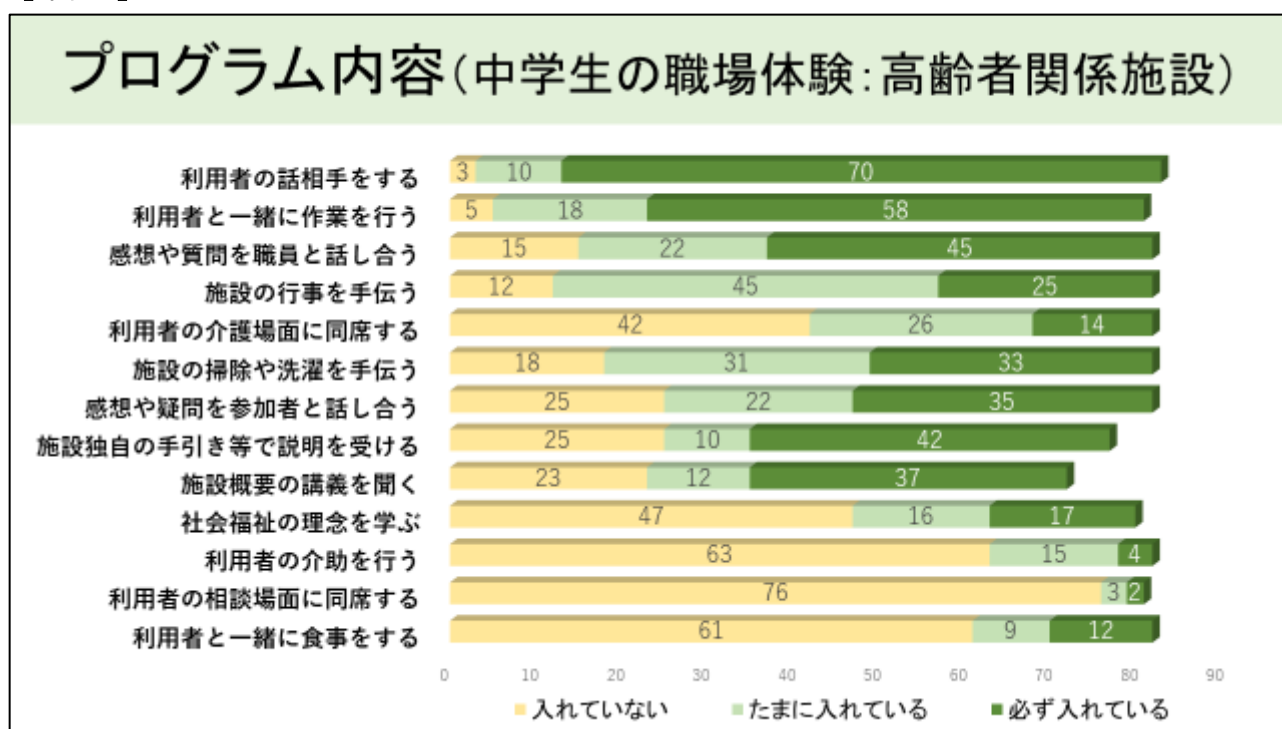


【中学生の職場体験プログラムの内容について】

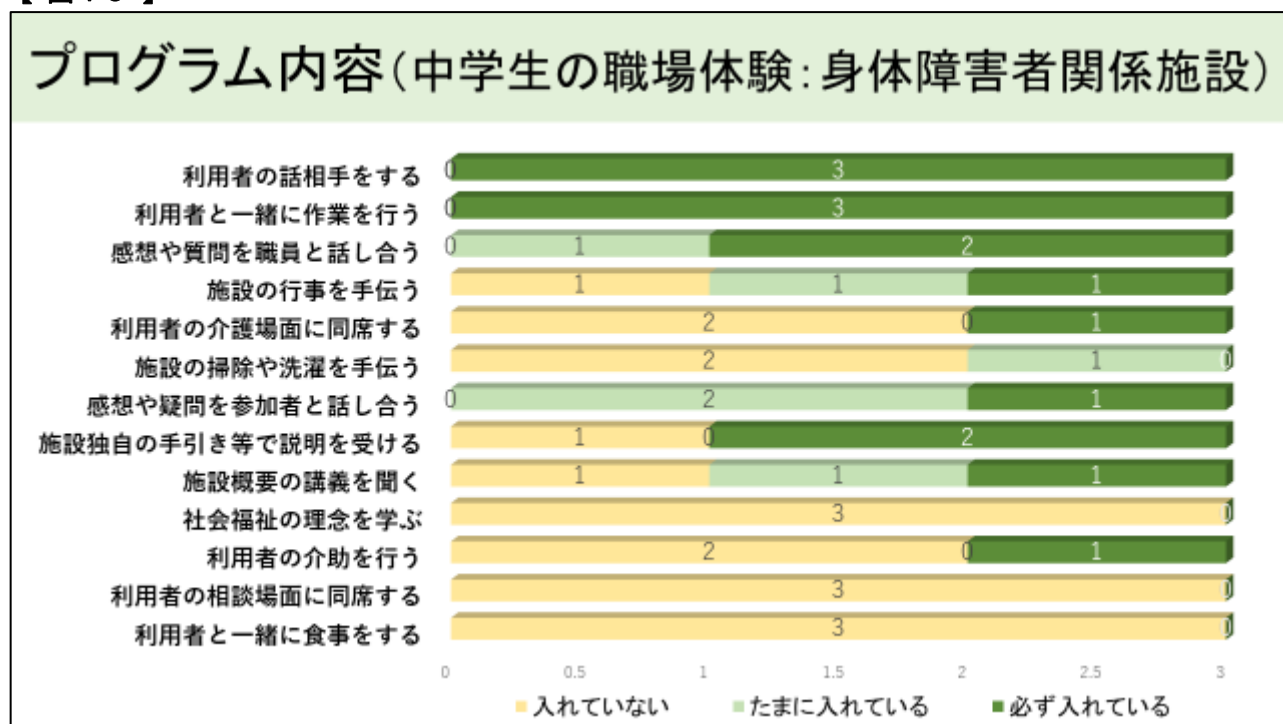
中学生の職場体験において「必ず入れている」プログラムとして最も多いものは、高齢者関係施設では「利用者の話相手をする」であり、知的障害者関係施設では「利用者と一緒に作業を行う」でした。

双方の施設種別とも、この2つに加えて「施設独自の手引き等で説明を受ける」、「施設概要の講義を聞く」、「感想や質問を職員と話し合う」というプログラムを入れているところが多いという共通の傾向でしたが、「利用者と一緒に食事をする」については、知的障害者関係施設では多くなっていますが、高齢者関係施設では非常に少数であり、この点において違いが見られました。(図9、図10、図11、図12、図13)

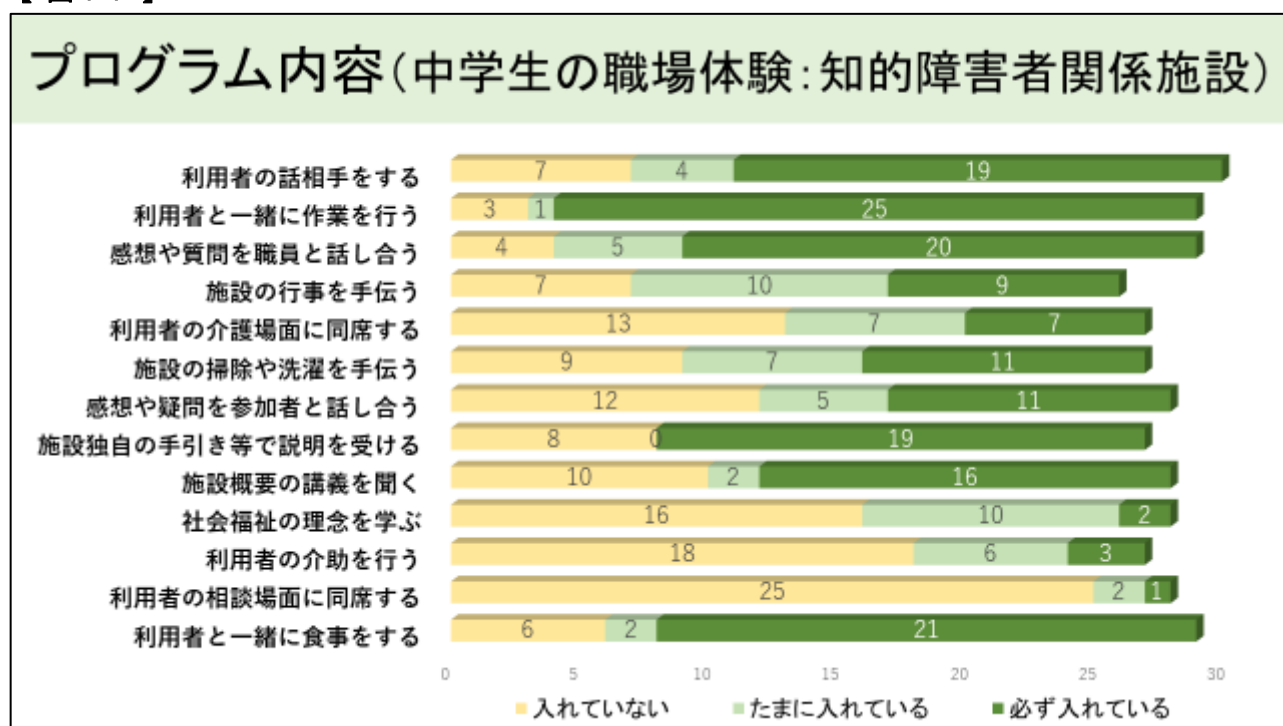
【図9】



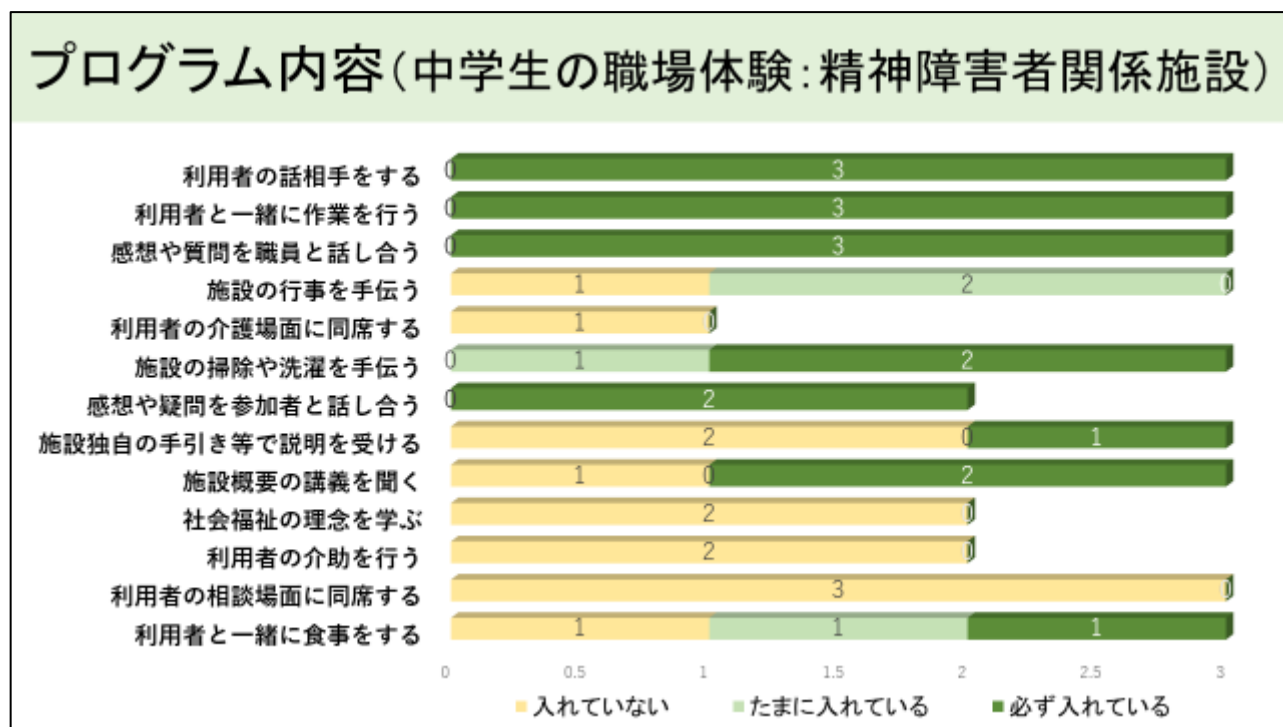
【図10】



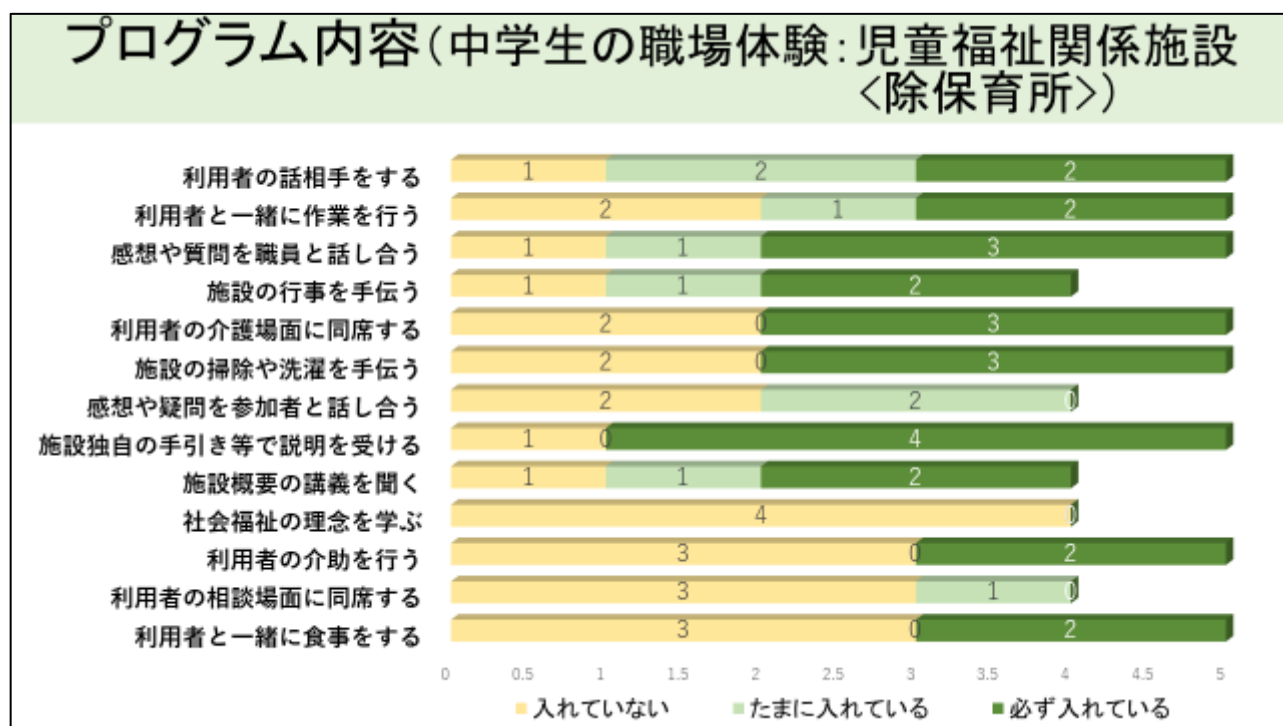
【図11】



【 図 1 2 】



【 図 1 3 】



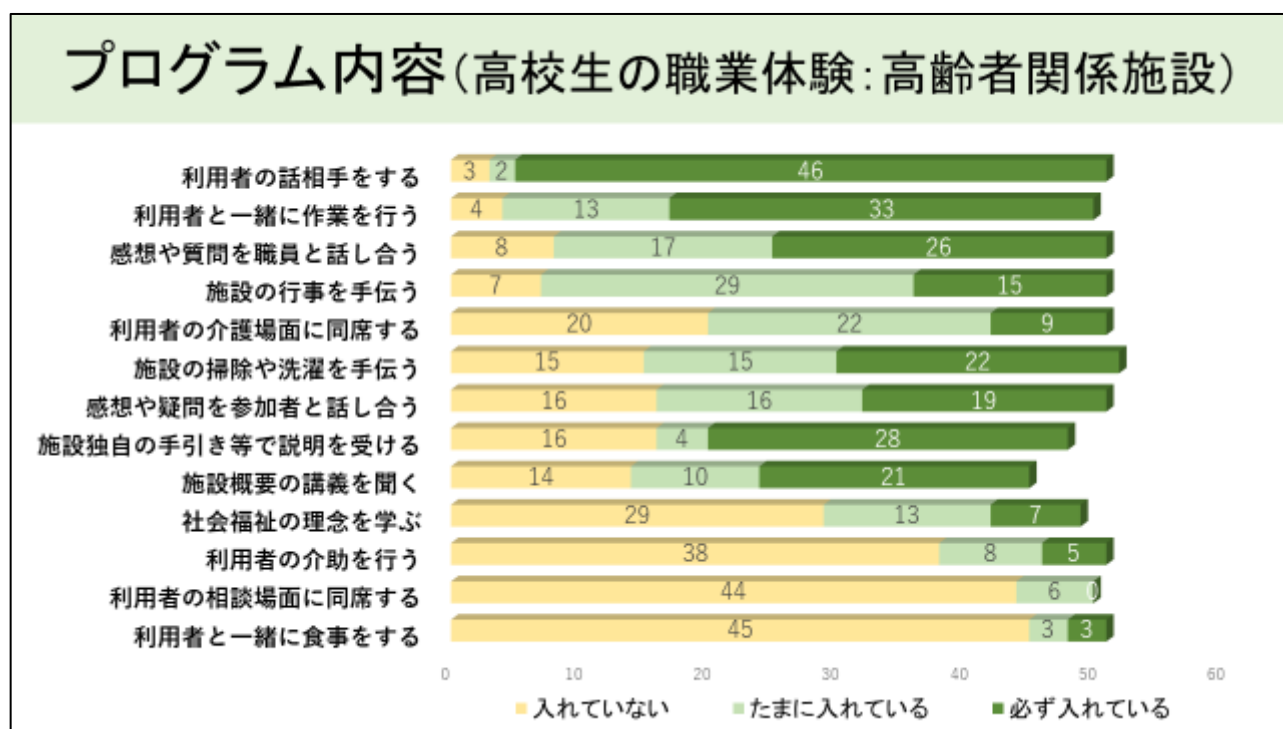
【高校生の職業体験プログラムの内容について】

高校生の職業体験プログラムの内容は、中学生の職場体験プログラムの内容と同じ傾向であり、「必ず入れている」が最も多いのは、高齢者関係施設では、「利用者の話相手をする」であり、知的障害者関係施設では「利用者と一緒に作業を行う」でした。

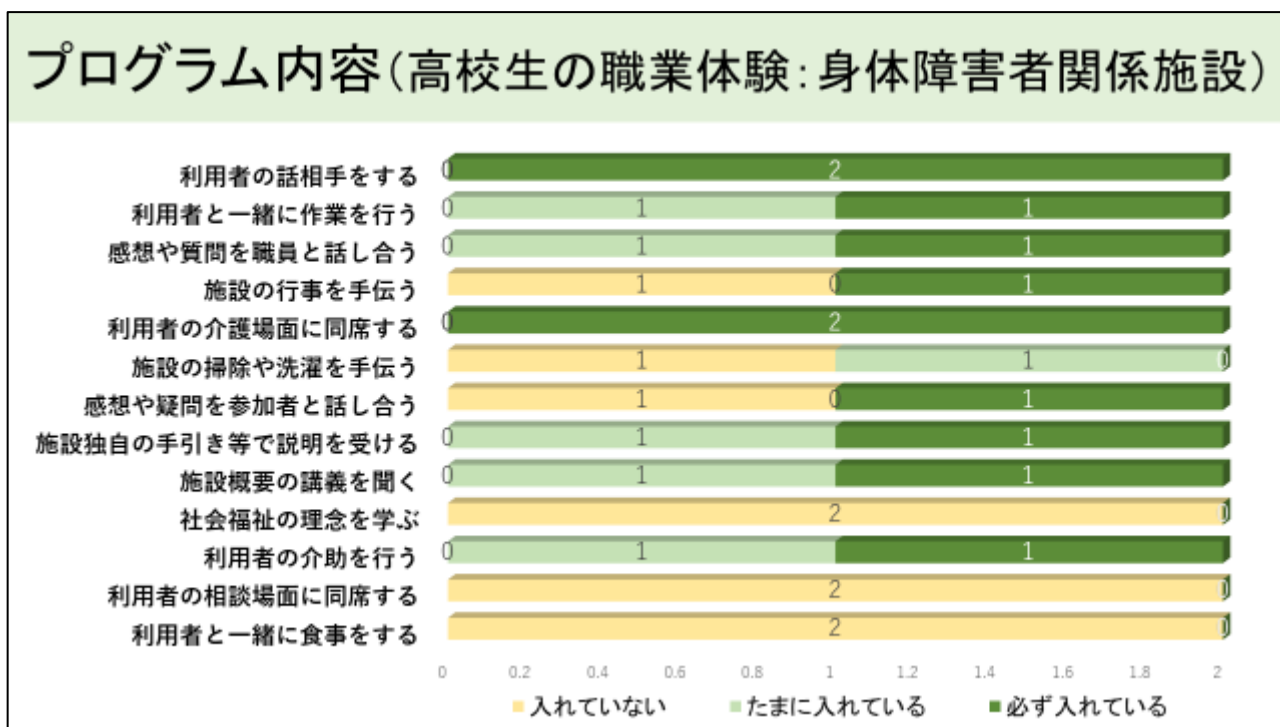
また、「施設独自の手引き等で説明を受ける」、「施設概要の講義を聞く」、「感想や質問を職員と話し合う」というプログラムについても中学生の職場体験と同様に入れているところが多くありました。また、「利用者と一緒に食事をする」は、知的障害者関係施設では多いのに対して、高齢者関係施設では非常に少数である点も中学生の職場体験と同じ結果となっています。

(図14、図15、図16、図17、図18)

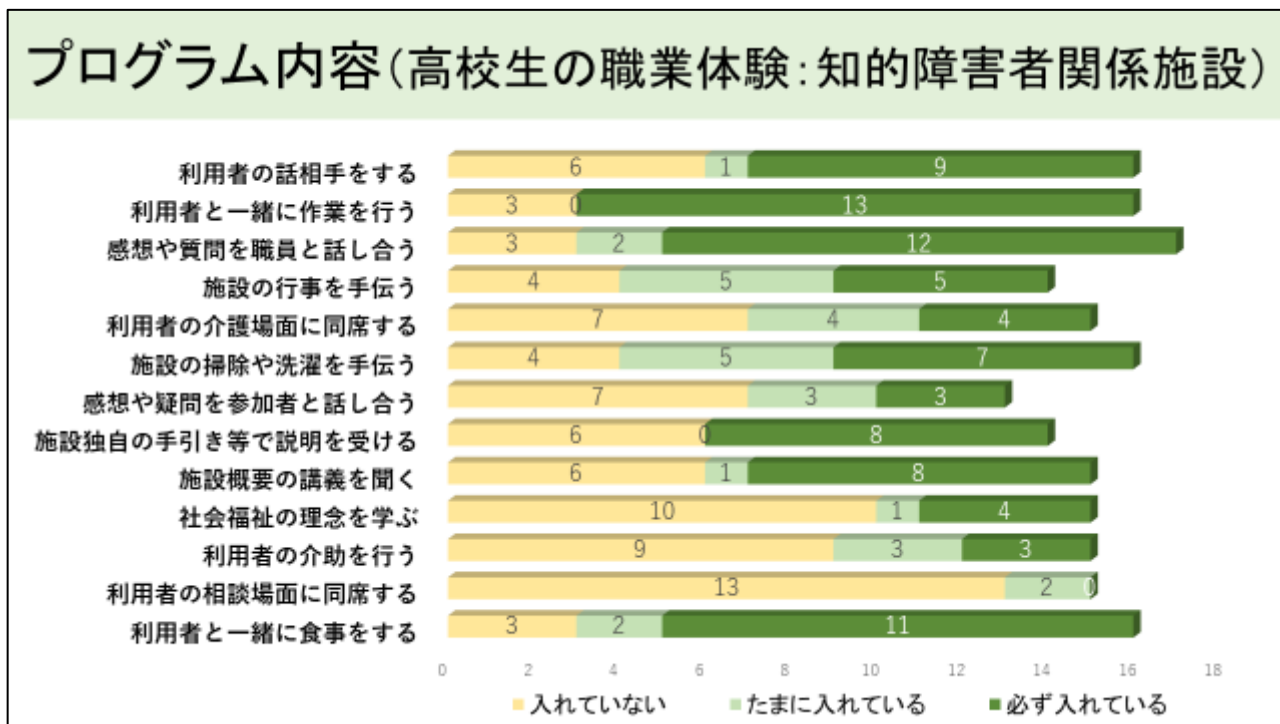
【図14】



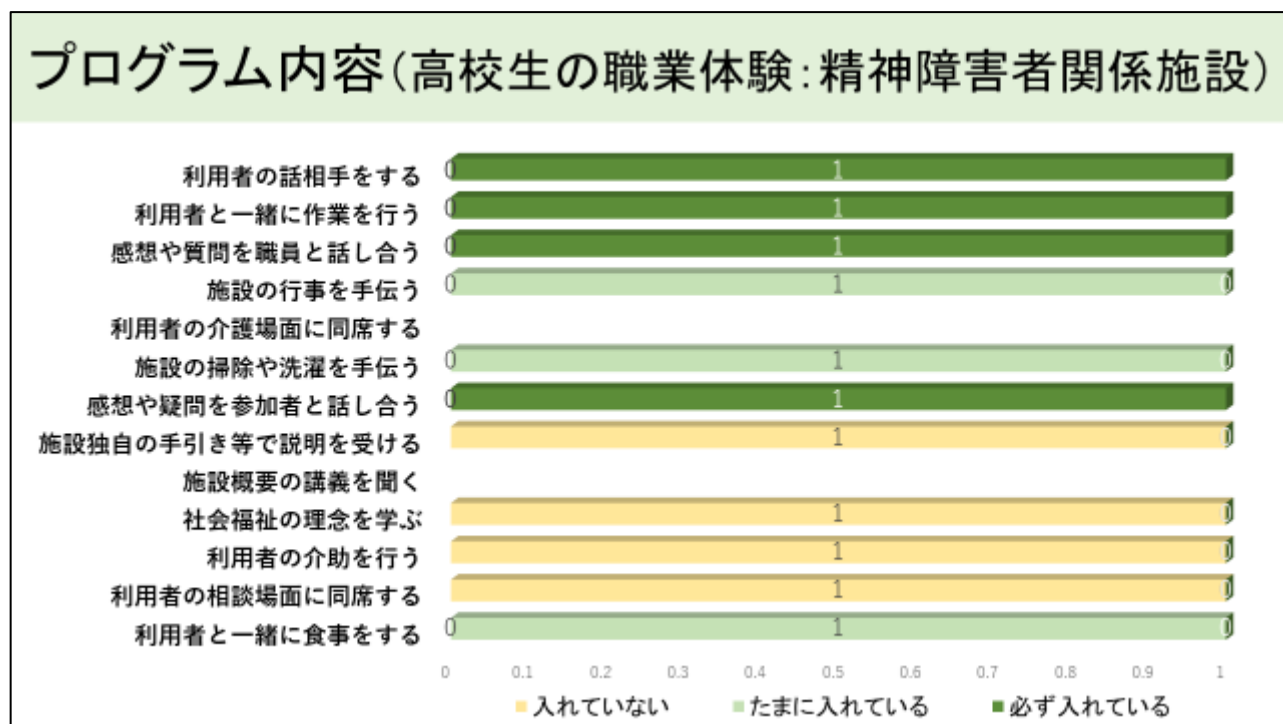
【 図 15 】



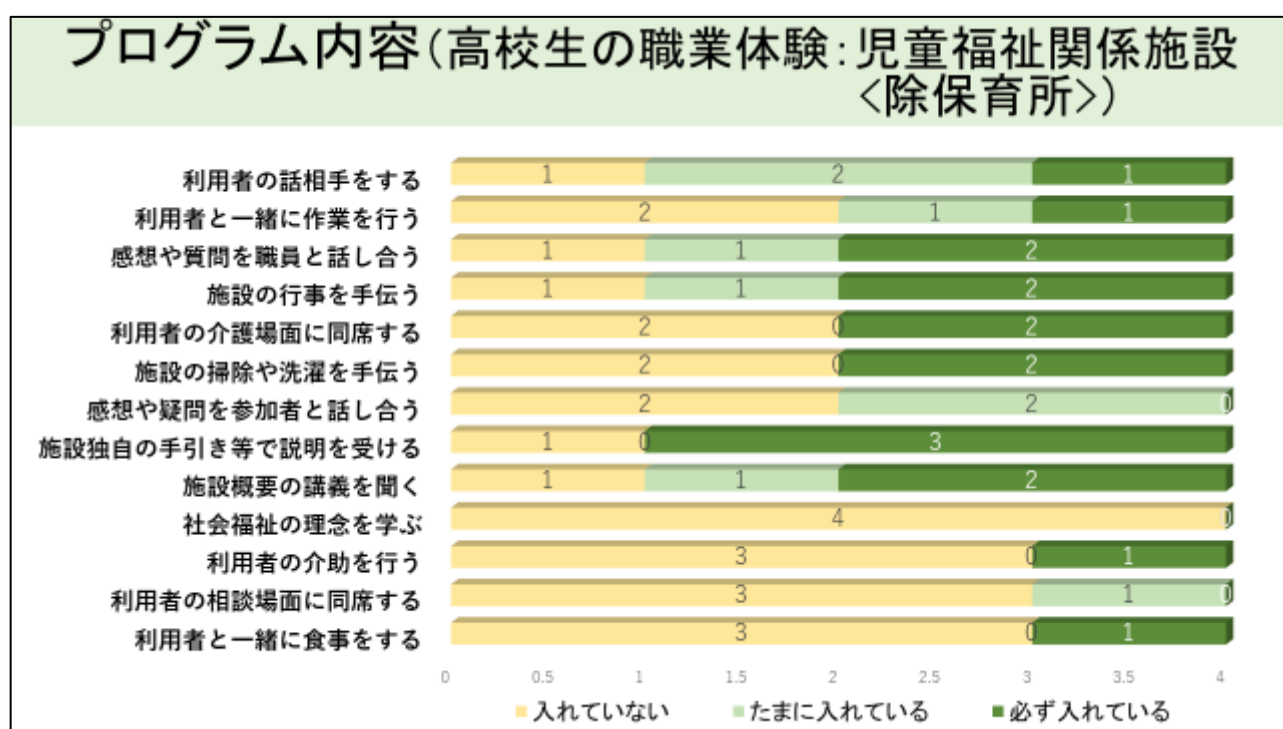
【 図 16 】



【 図 1 7 】



【 図 1 8 】



【介護等体験プログラムの内容について】

大学生の介護等体験プログラムにおいて「必ず入れている」が最も多かったのは、高齢者関係施設では「利用者の話相手をする」であり、知的障害者関係施設では「利用者と一緒に作業を行う」、「感想や質問を職員と話し合う」でした。

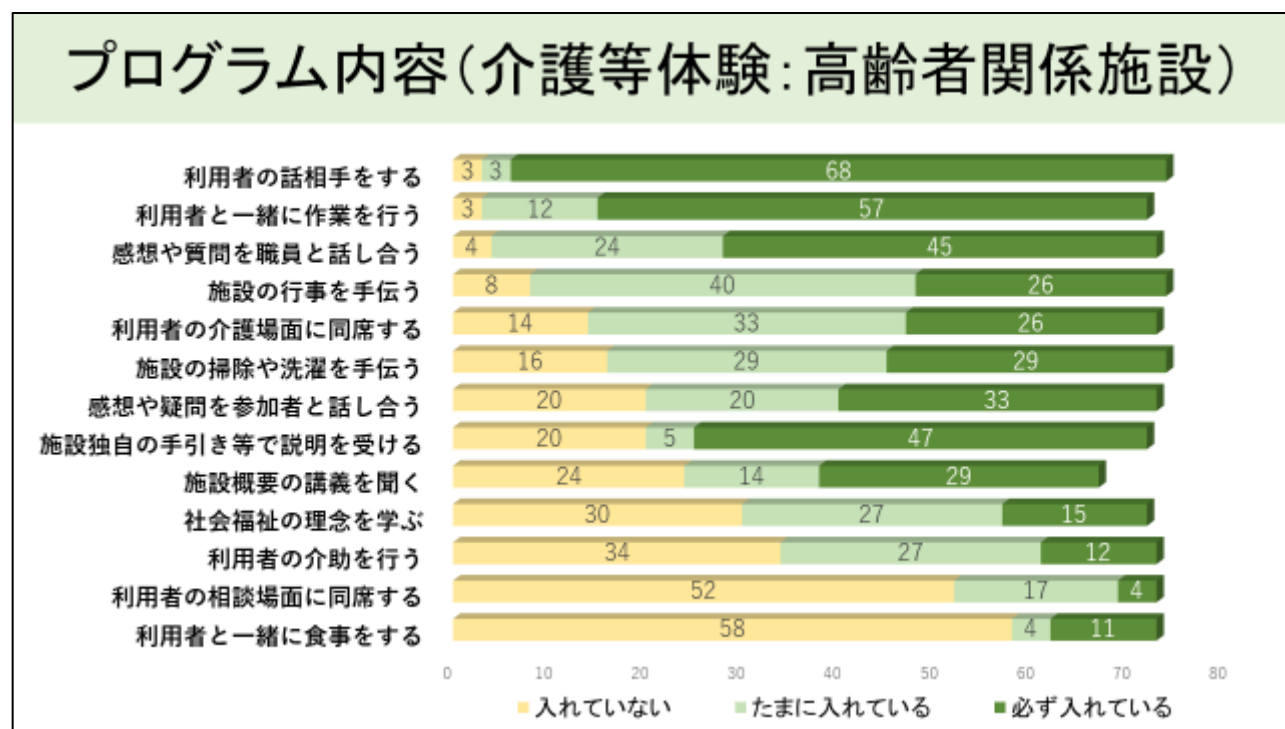
また、小学生、中学生、高校生を対象としたプログラムと異なる点に注目してみると、「利用者の介護場面に同席する」や「利用者の介助を行う」を入れているところが他に比べて多くなっていました。

「利用者と一緒に食事をする」は、他のプログラムと同様に高齢者関係施設では少なく、知的障害者関係施設では多くなっていました。

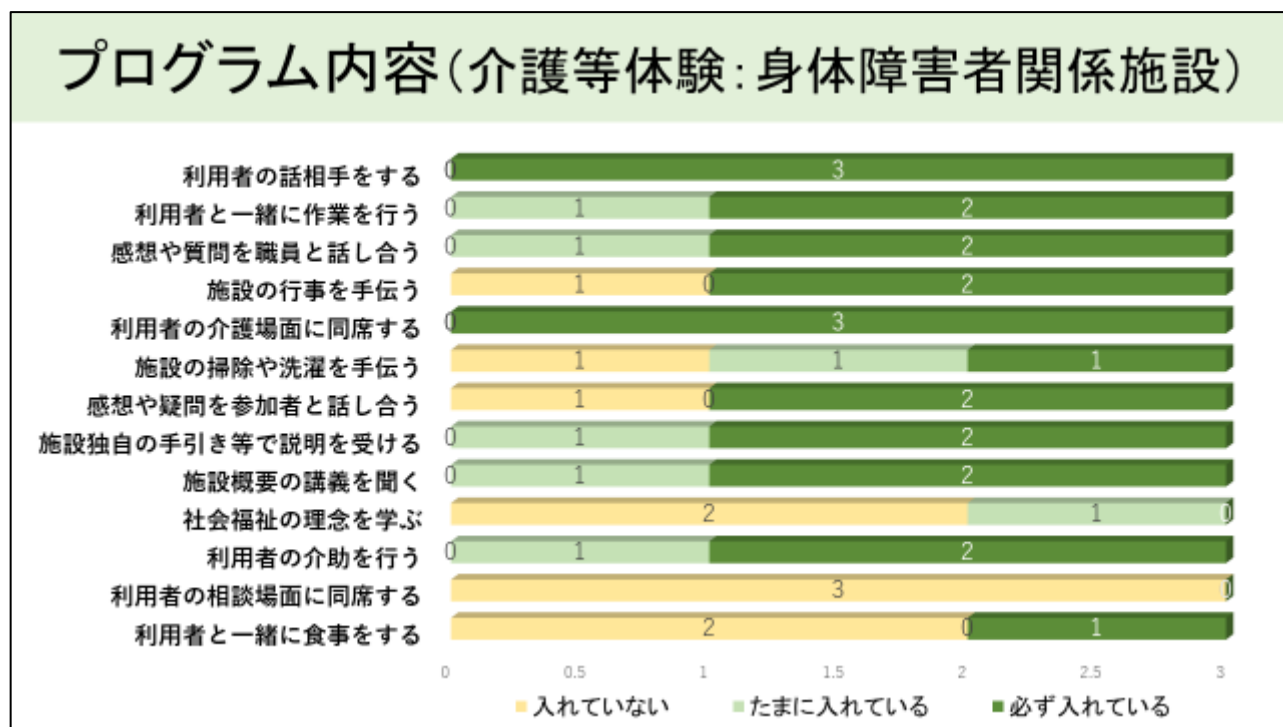
なお、介護等体験を受け入れしている施設として、児童福祉関係施設（保育所を除く）が9カ所回答してくださっており、参考に取り上げると「必ず入れている」プログラムとして最も多いのは、「感想や質問を職員と話し合う」でした。

（図19、図20、図21、図22、図23）

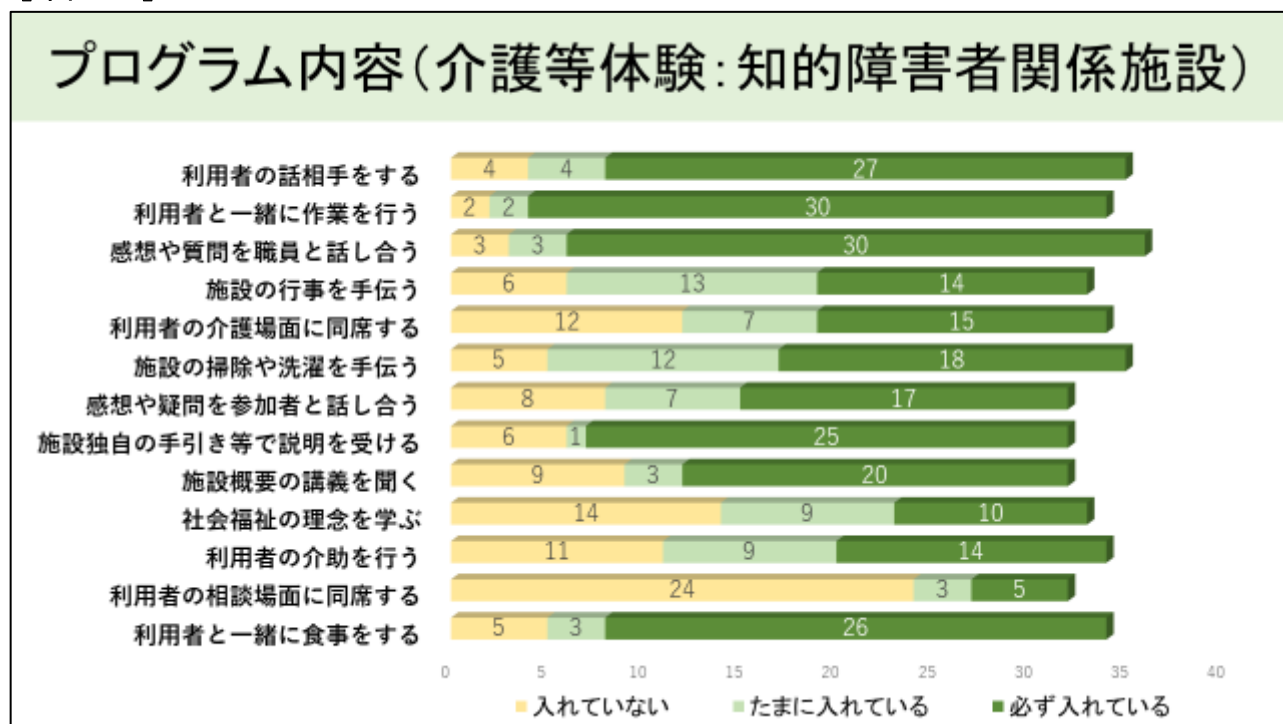
【図19】



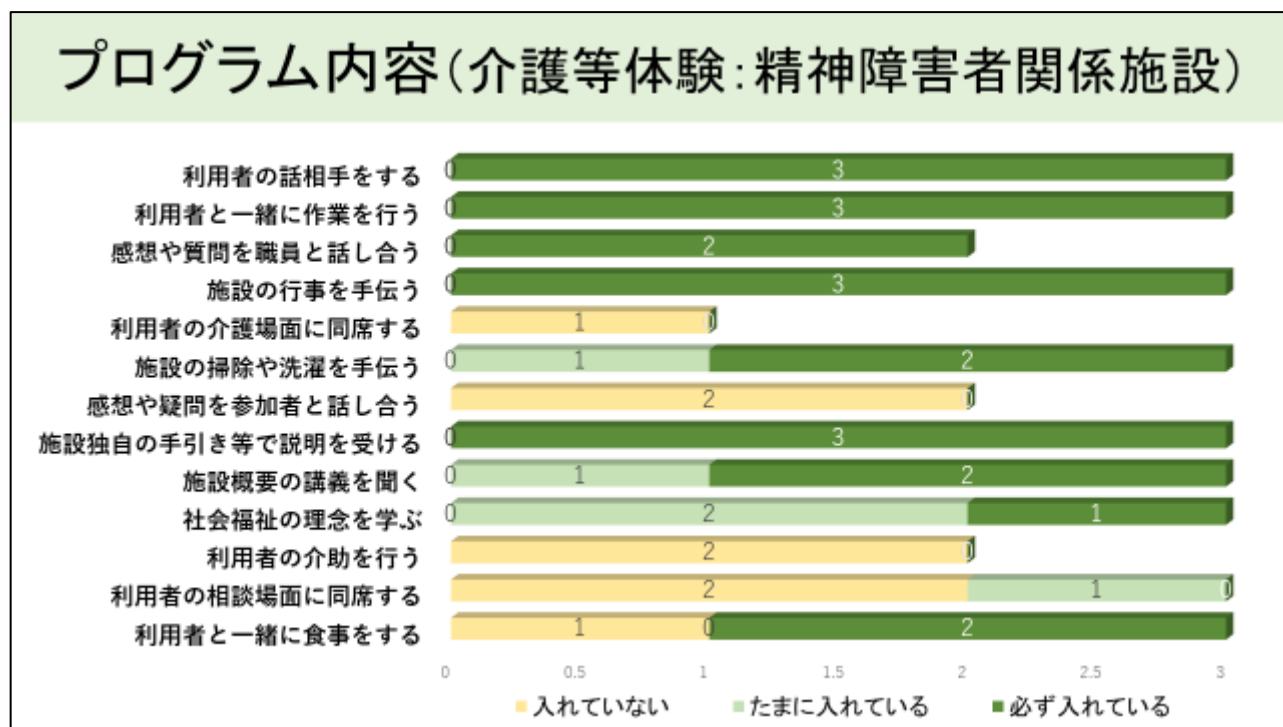
【図20】



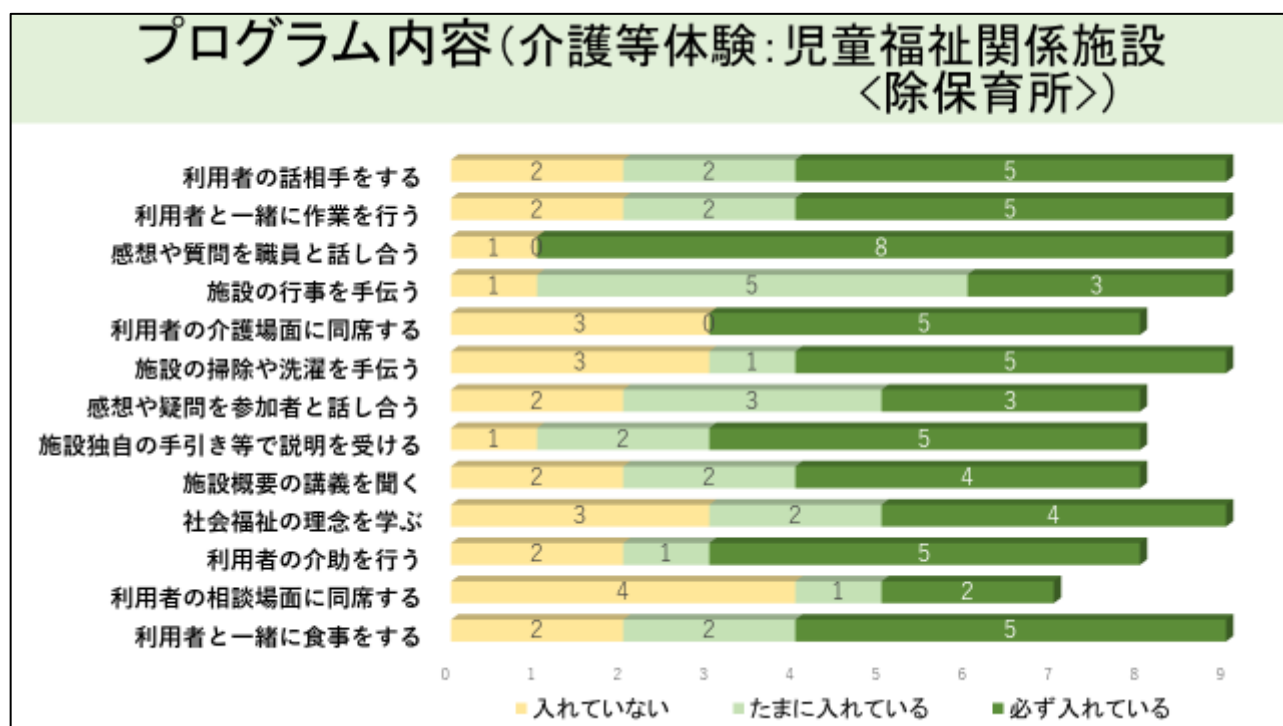
【図21】



【図22】



【図23】



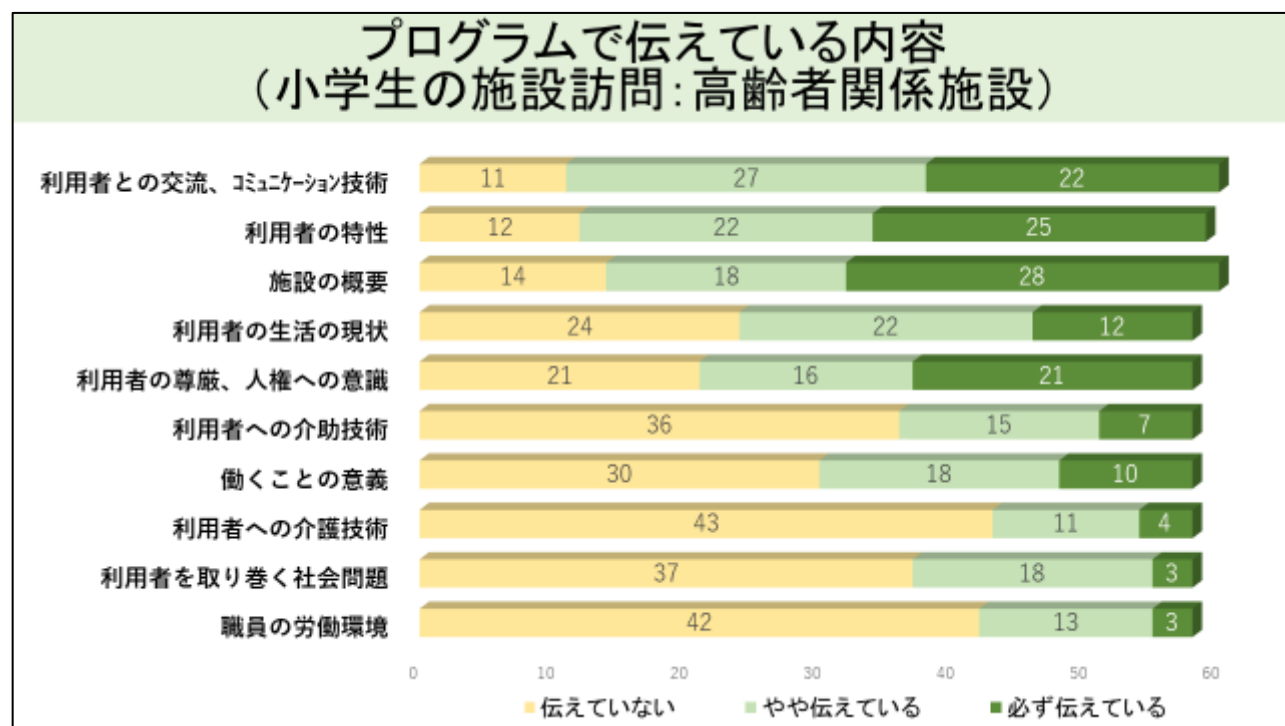
【小学生の施設訪問プログラムで伝えている内容について】

「必ず伝えている」内容として、高齢者関係施設では「施設の概要」が最も多く、次いで「利用者の特性」、「利用者との交流、コミュニケーション技術」、「利用者の尊厳、人権への意識」であり、これは知的障害者関係施設でも同様な状況でした。

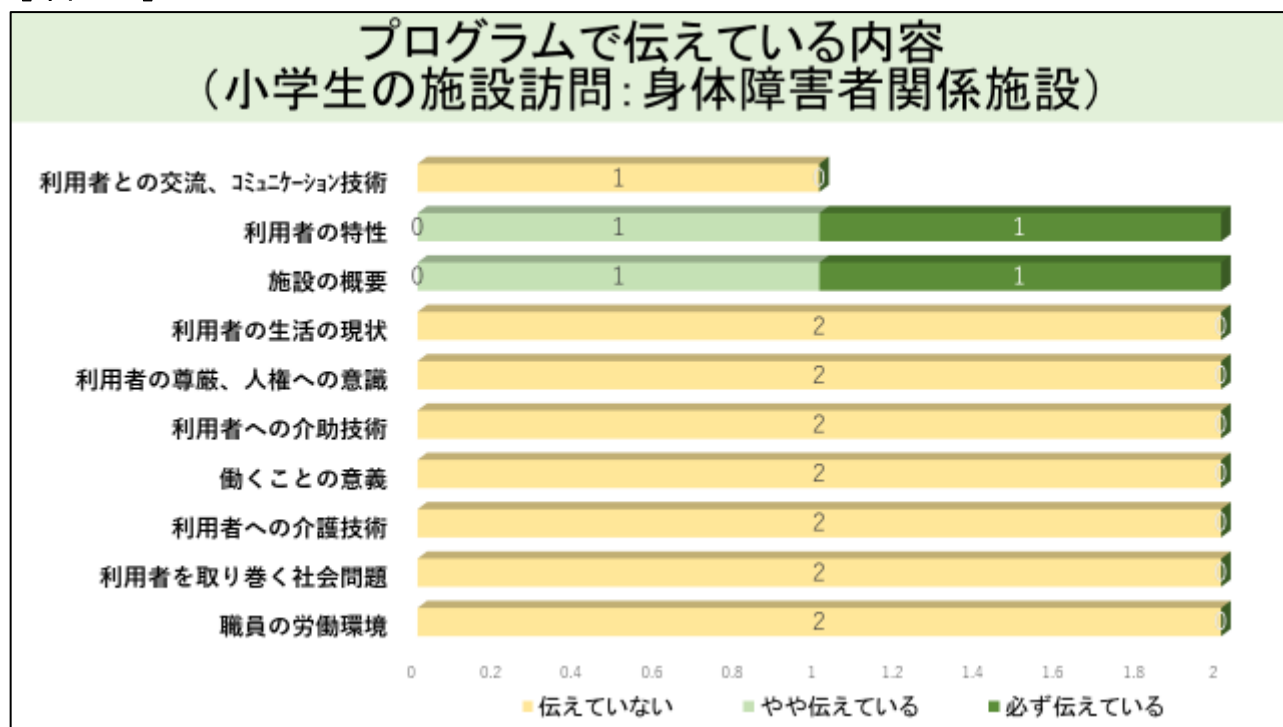
ただし、「利用者の尊厳、人権への意識」については、高齢者関係施設、知的障害者関係施設とも「必ず伝えている」と同数で「伝えていない」と回答されている施設もありました。

(図24、図25、図26、図27、図28)

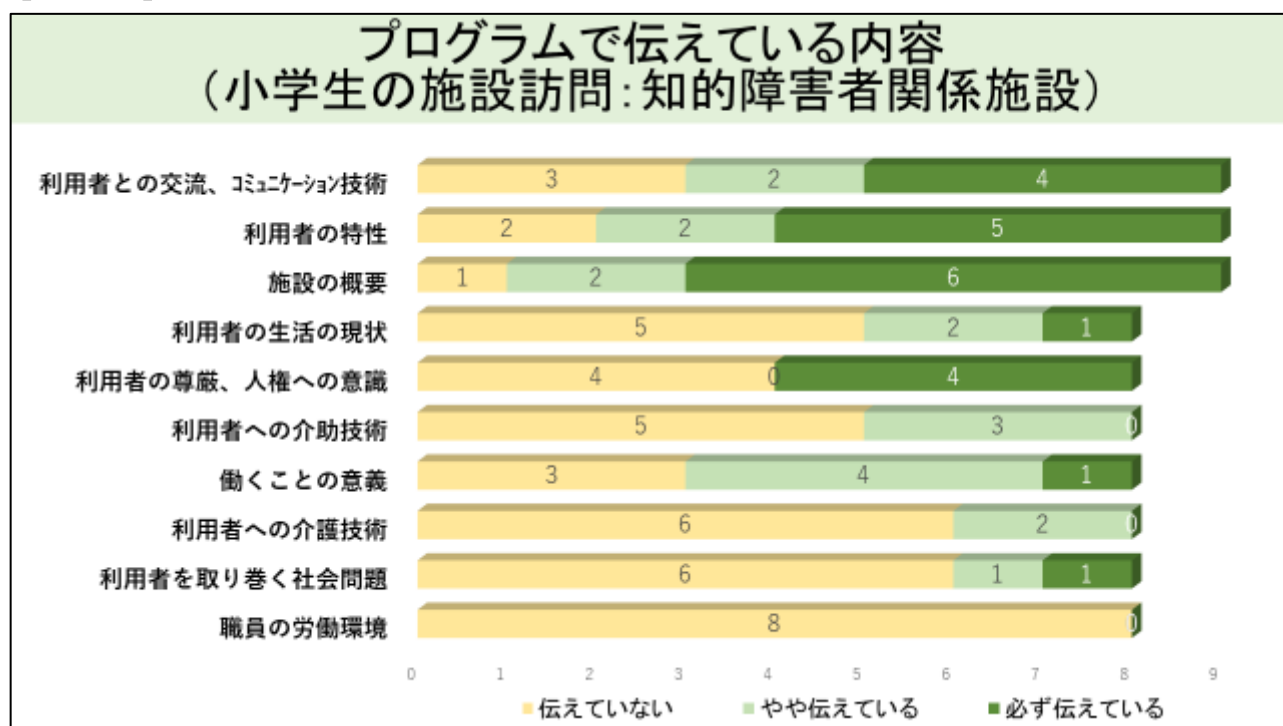
【図24】



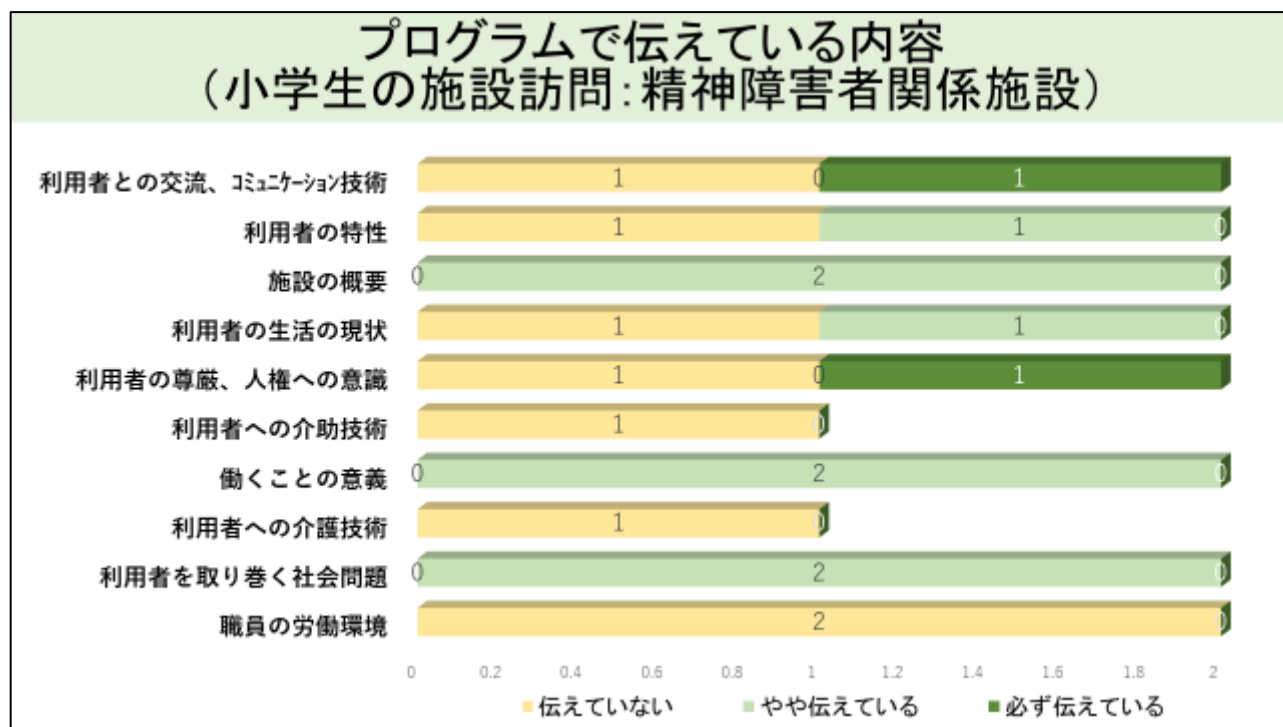
【 図 2 5 】



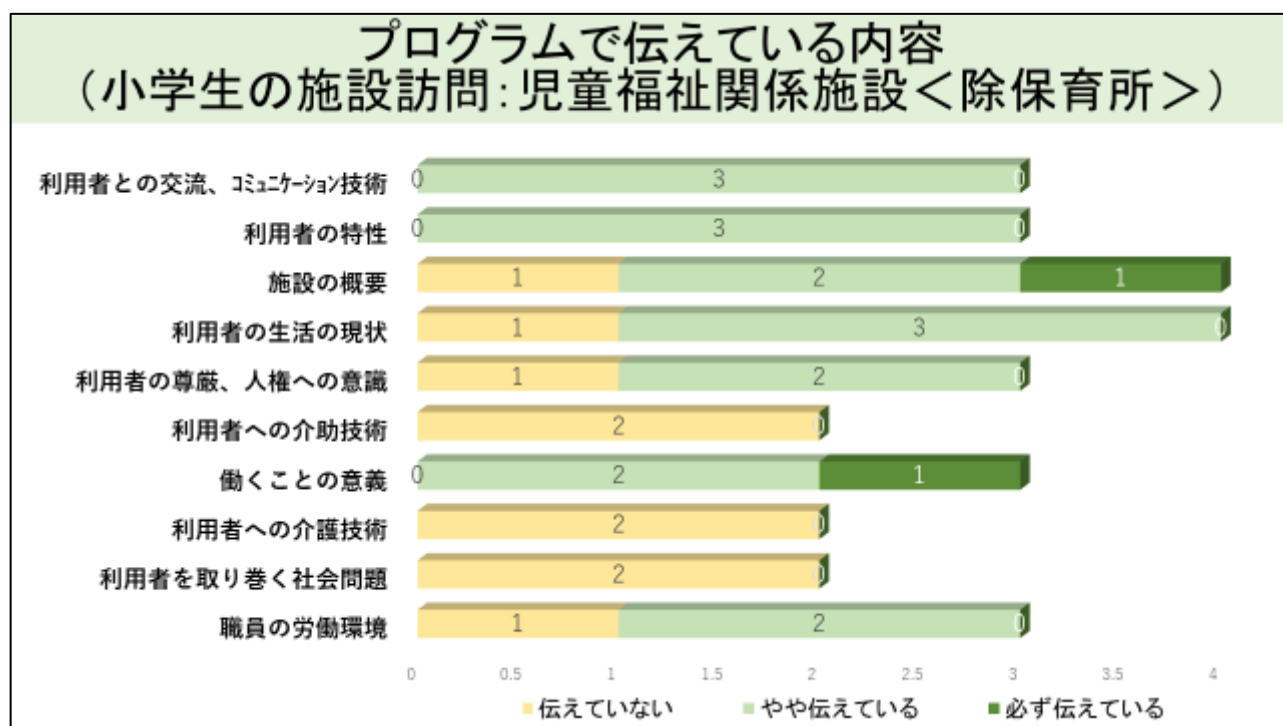
【 図 2 6 】



【図27】



【図28】



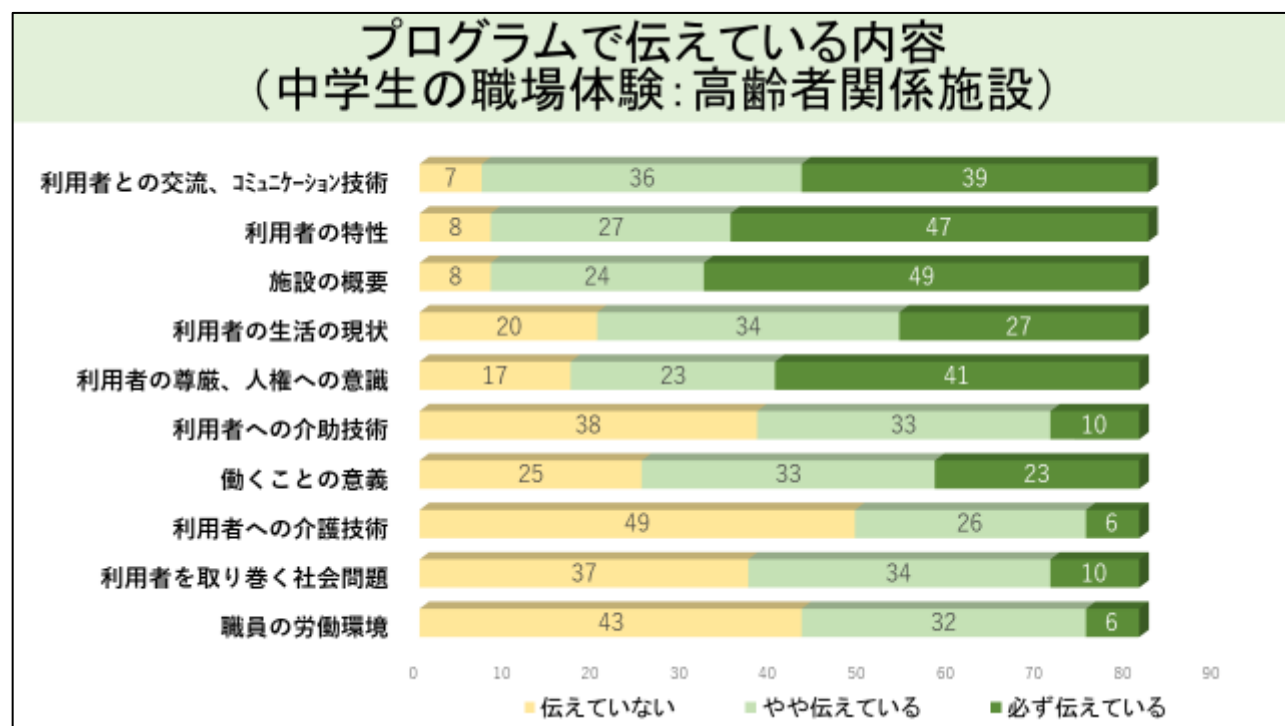
【中学生の職場体験プログラムで伝えている内容について】

「必ず伝えている」内容は、小学生の施設訪問と同じ傾向であり、高齢者関係施設、値手は障害者関係施設ともに「施設の概要」が最も多く、次いで「利用者の特性」、「利用者との交流、コミュニケーション技術」、「利用者の尊厳、人権への意識」でした。

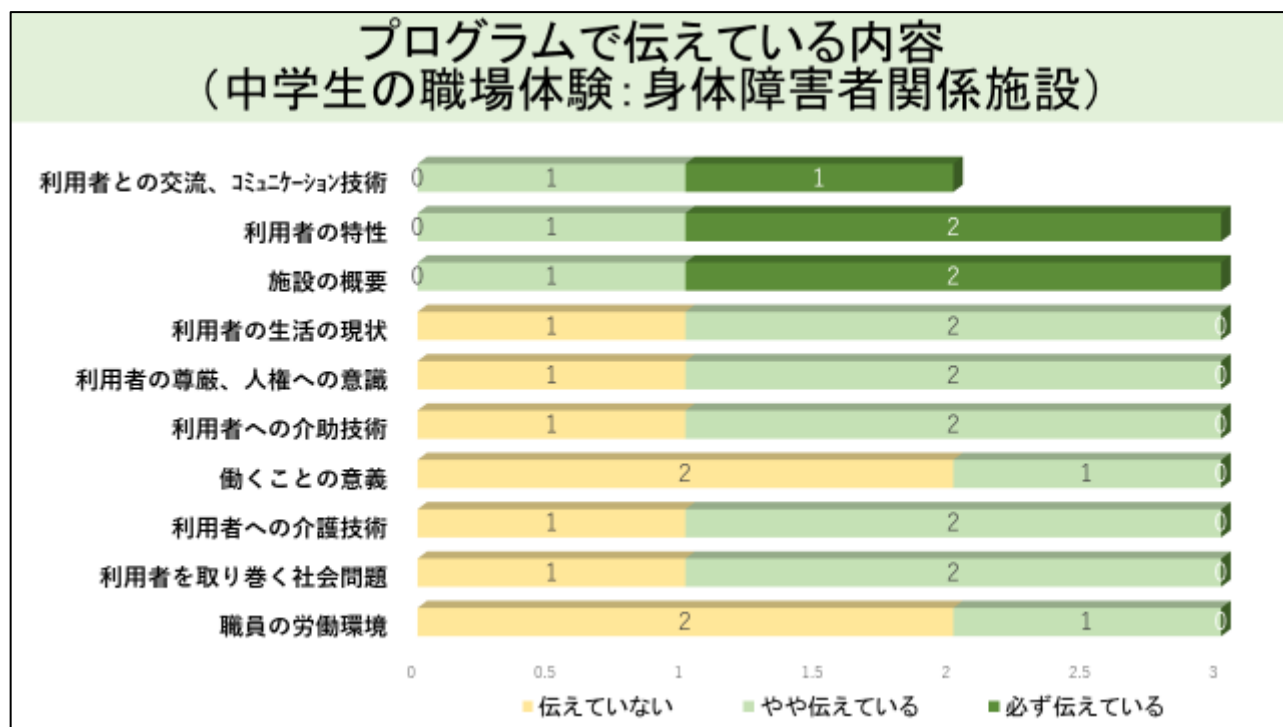
「利用者の尊厳、人権への意識」については、小学生の施設訪問に比べると、高齢者関係施設、知的障害者関係施設とも「必ず伝えている」と回答する施設が増えています。

(図29、図30、図31、図32、図33)

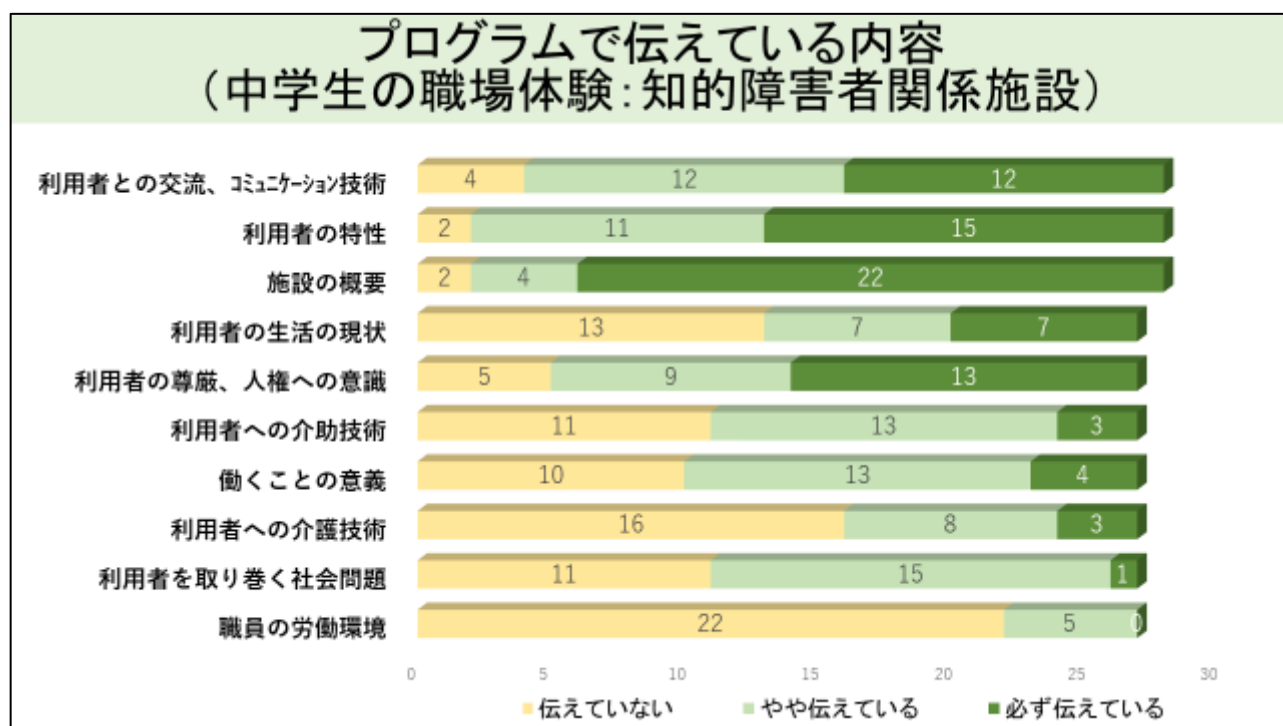
【図29】



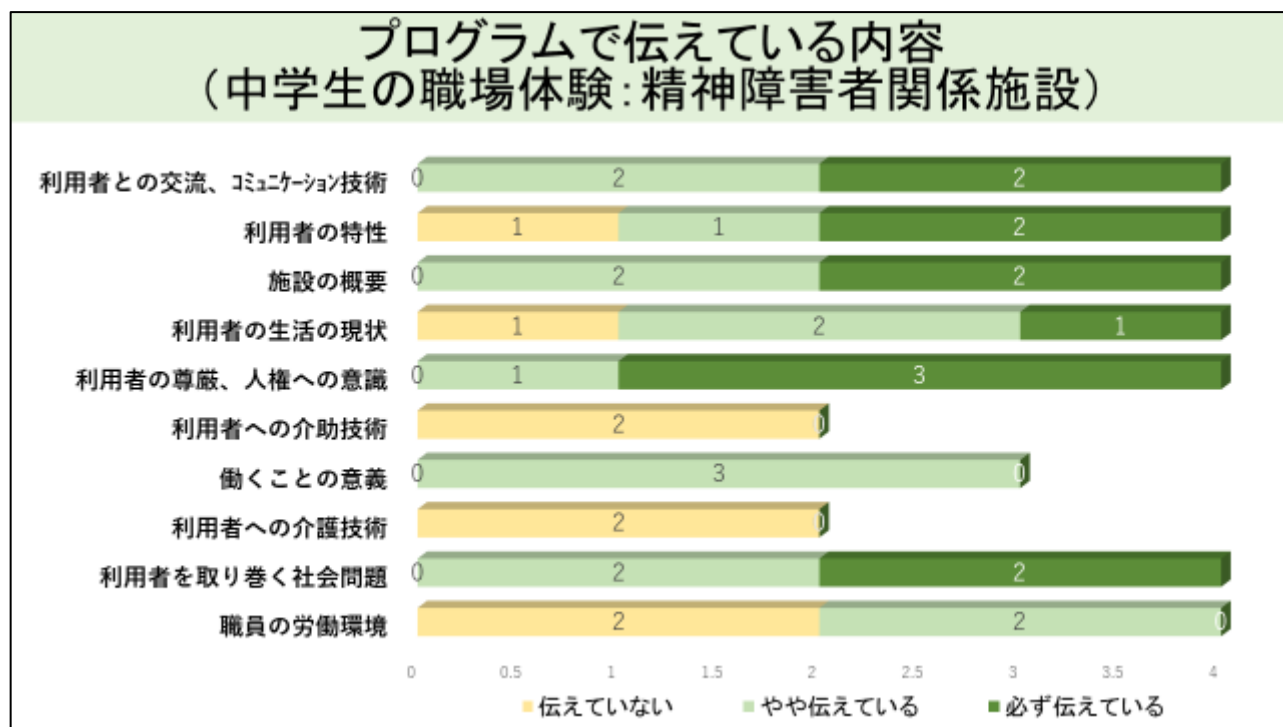
【 図 3 0 】



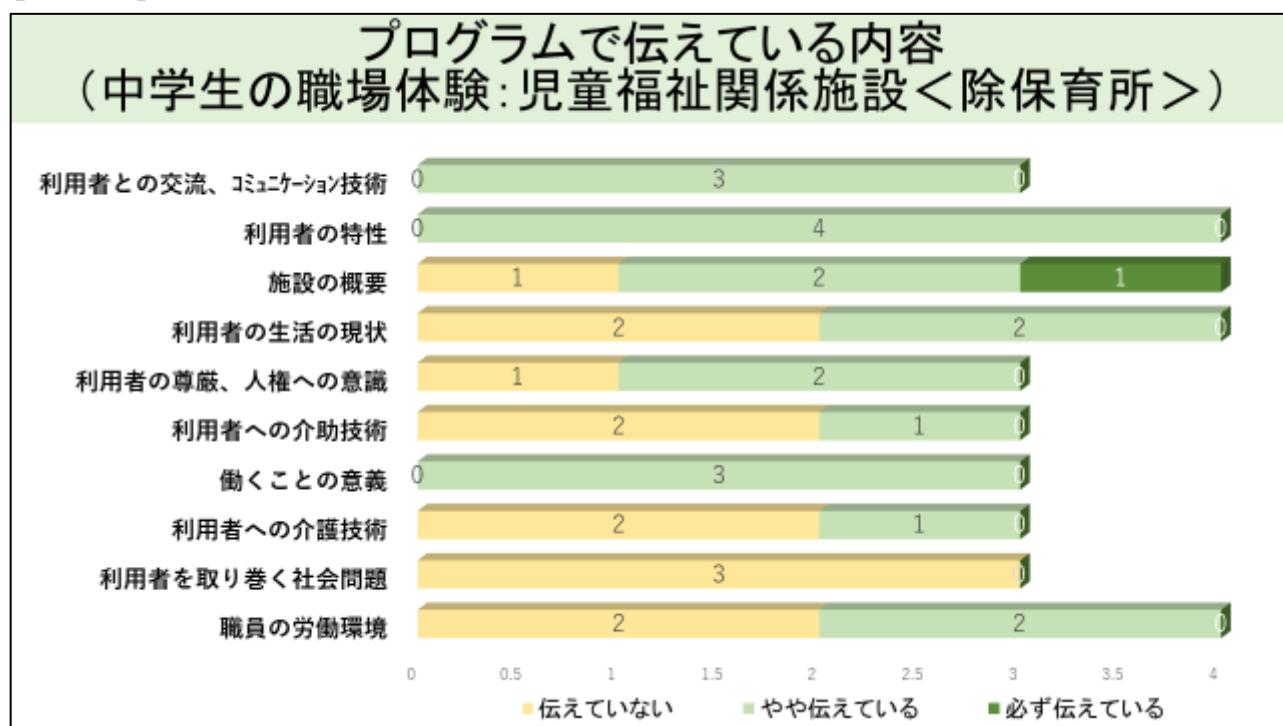
【 図 3 1 】



【 図 3 2 】



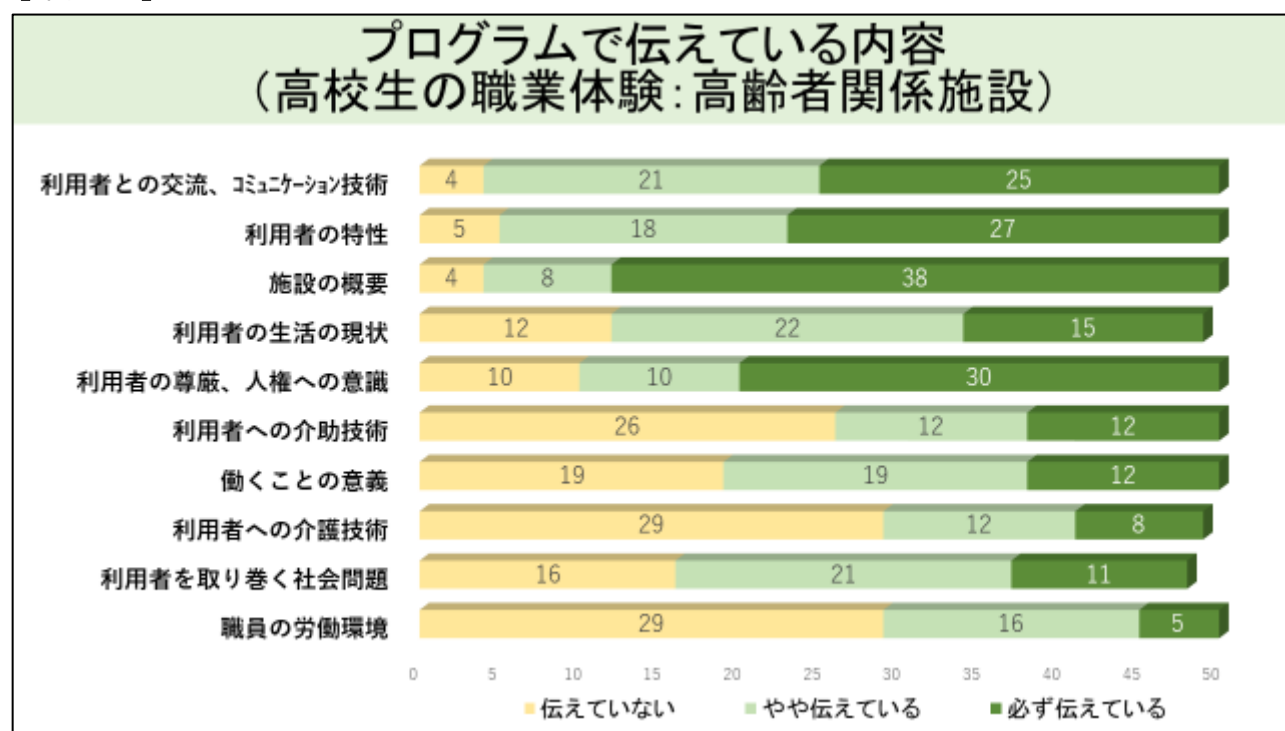
【 図 3 3 】



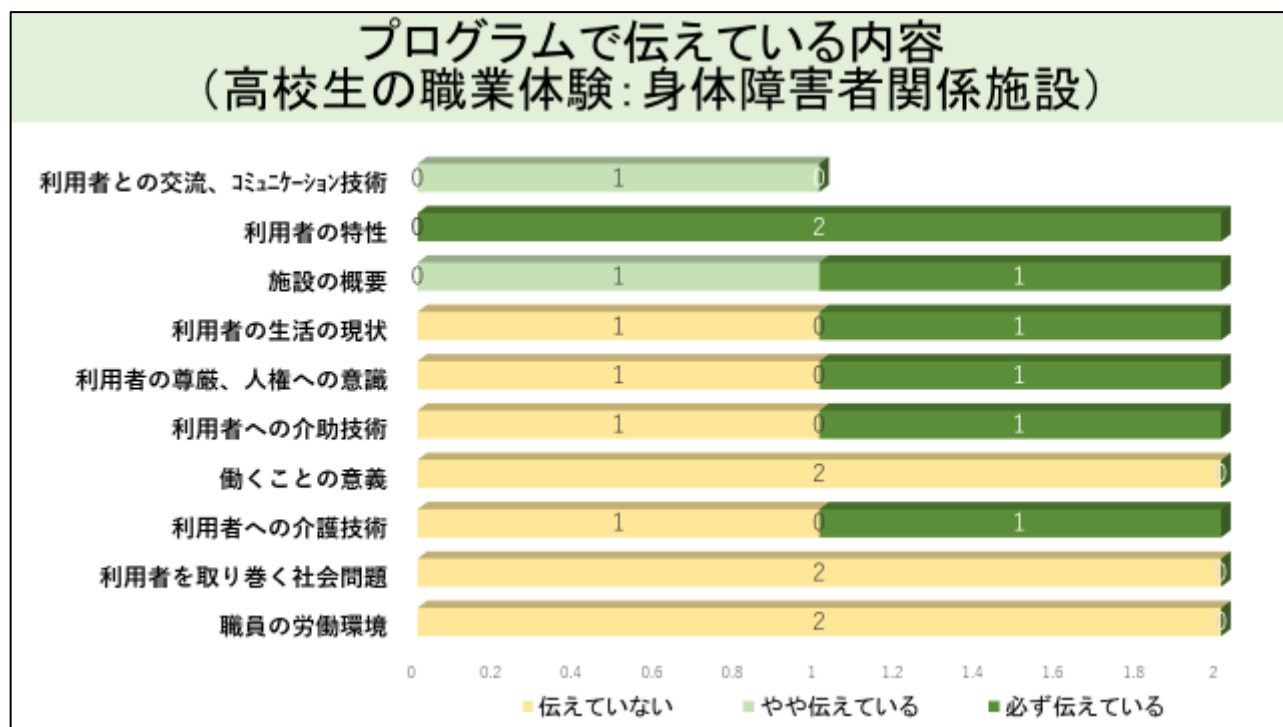
【高校生の職業体験プログラムで伝えている内容について】

「必ず伝えている」内容として、高齢者関係施設では「施設の概要」が最も多くなっているのは他と同じでしたが、次いで「利用者の尊厳、人権への意識」が多くなっており、他との違いが見られました。知的障害者関係施設では「施設の概要」が最も多く、これと同程度に「利用者の特性」が多くなっており、次いで「利用者の尊厳、人権への意識」、「利用者との交流、コミュニケーション技術」となっていました。（図34、図35、図36、図37、図38）

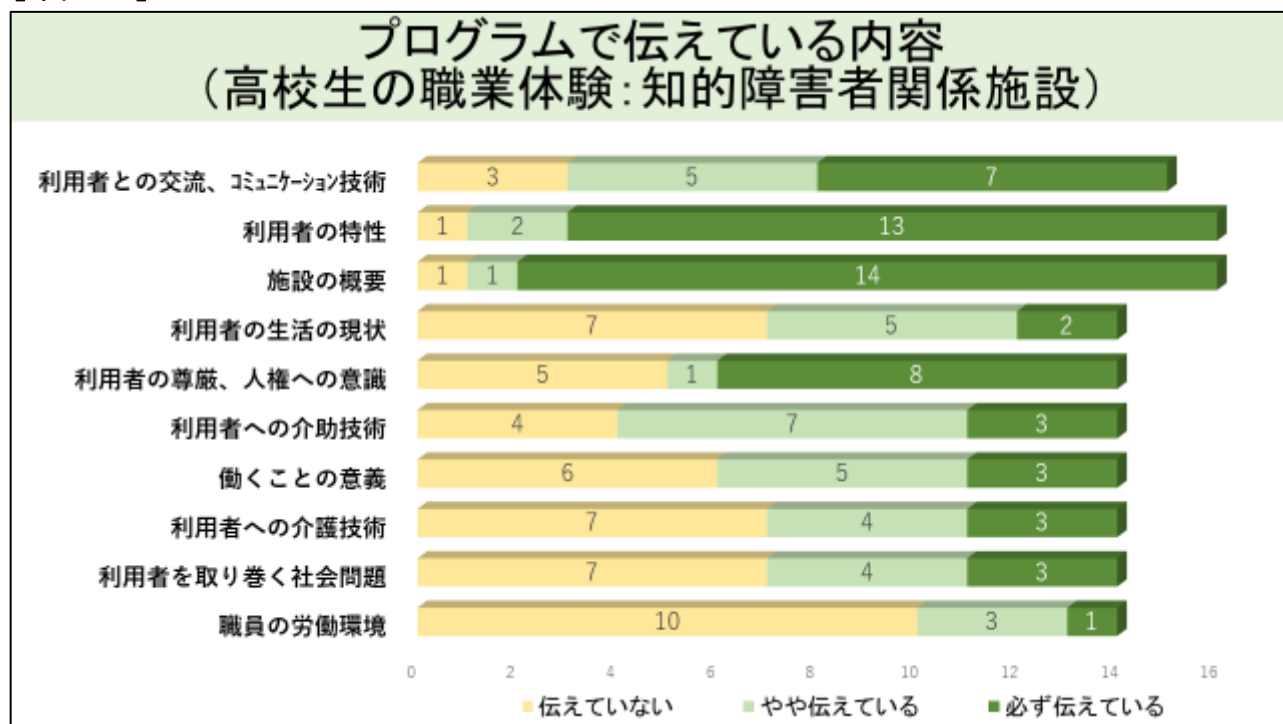
【図34】



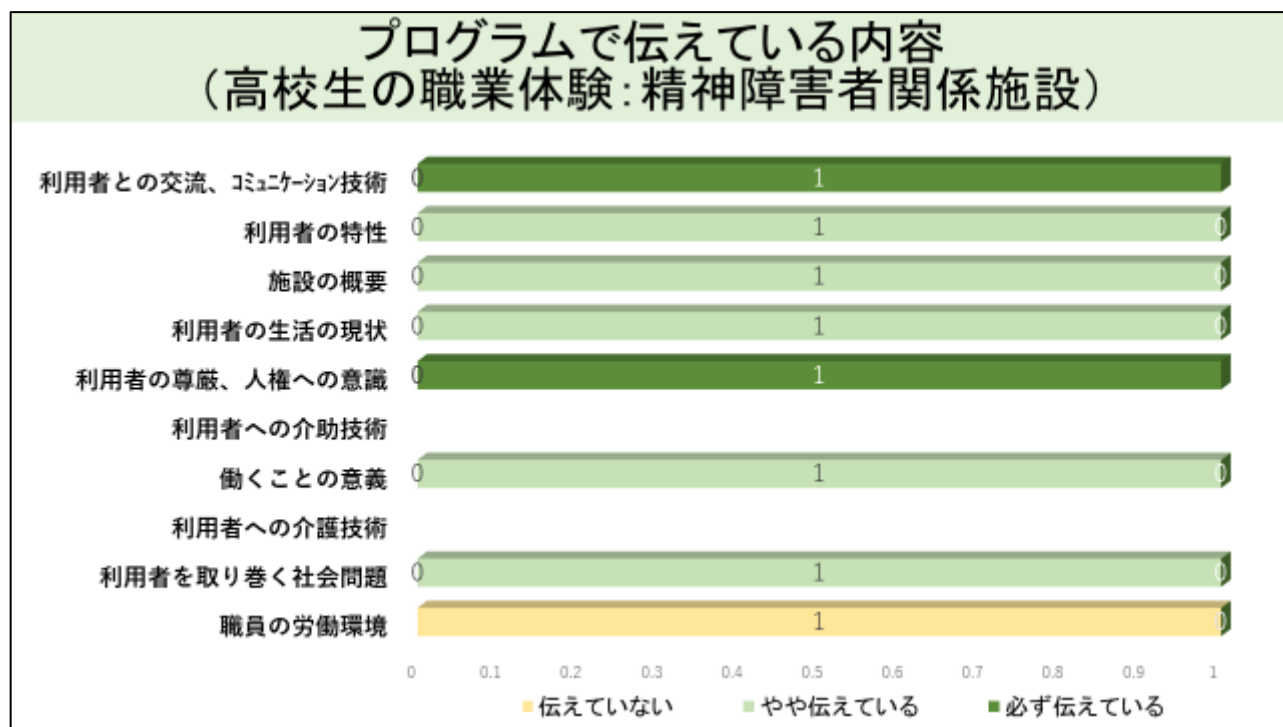
【 図 3 5 】



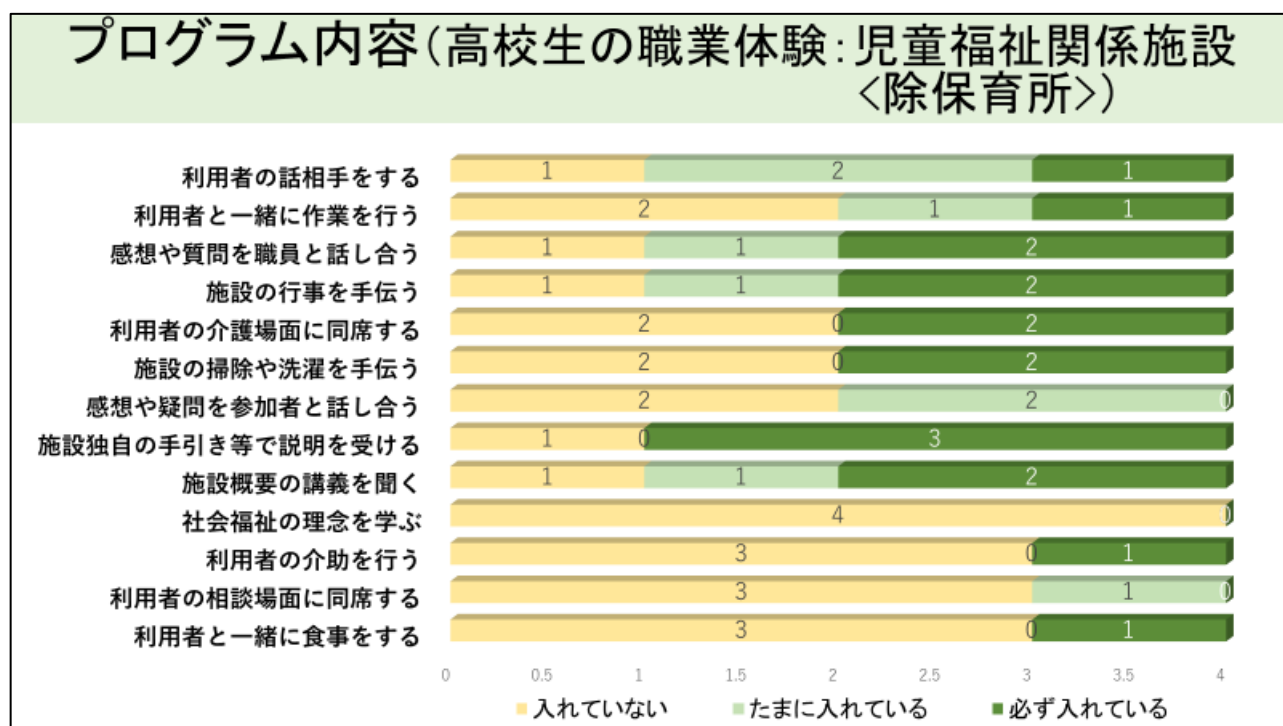
【 図 3 6 】



【図37】



【図38】



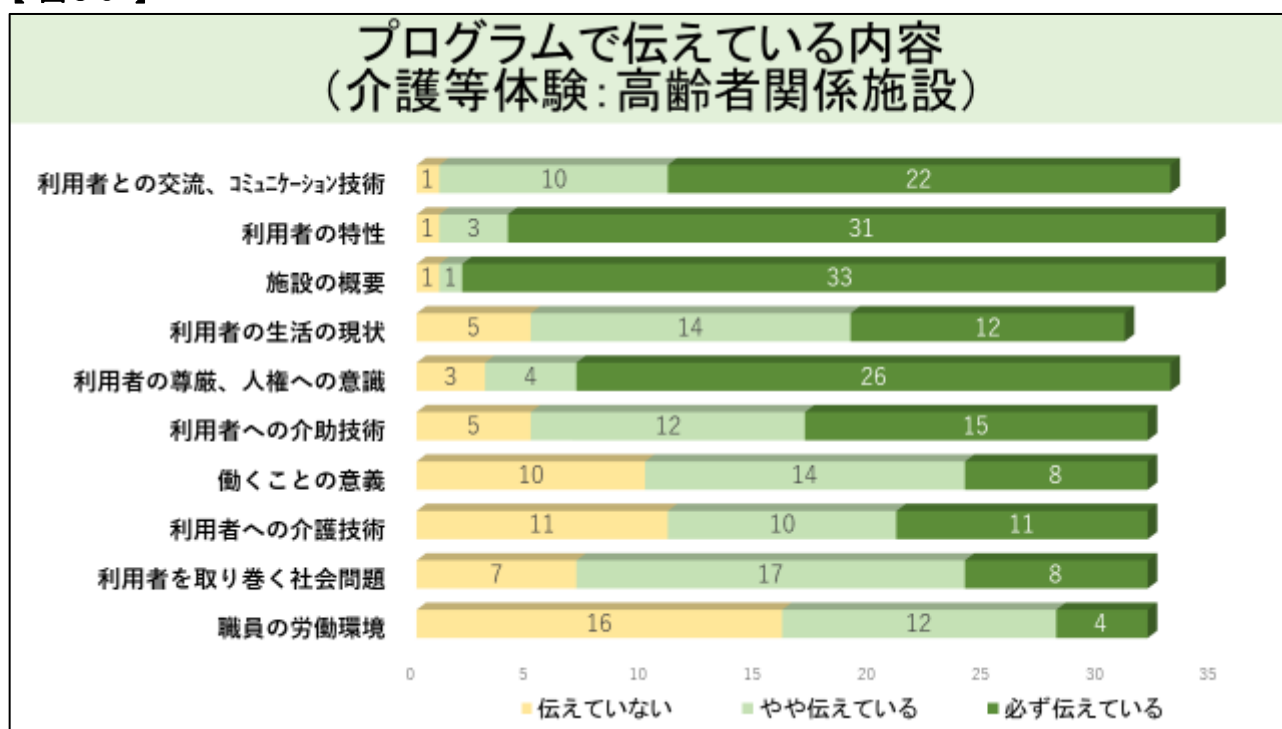
【介護等体験プログラムで伝えている内容について】

「必ず伝えている」内容として高齢者関係施設では、「施設の概要」、「利用者の特性」、「利用者の尊厳、人権への意識」、「利用者との交流、コミュニケーション技術」の順に多く、また他のプログラムに比べると、「利用者への介助技術」、「利用者への介護技術」が多くなっていました。これは、知的障害者関係施設においても同様の結果でした。

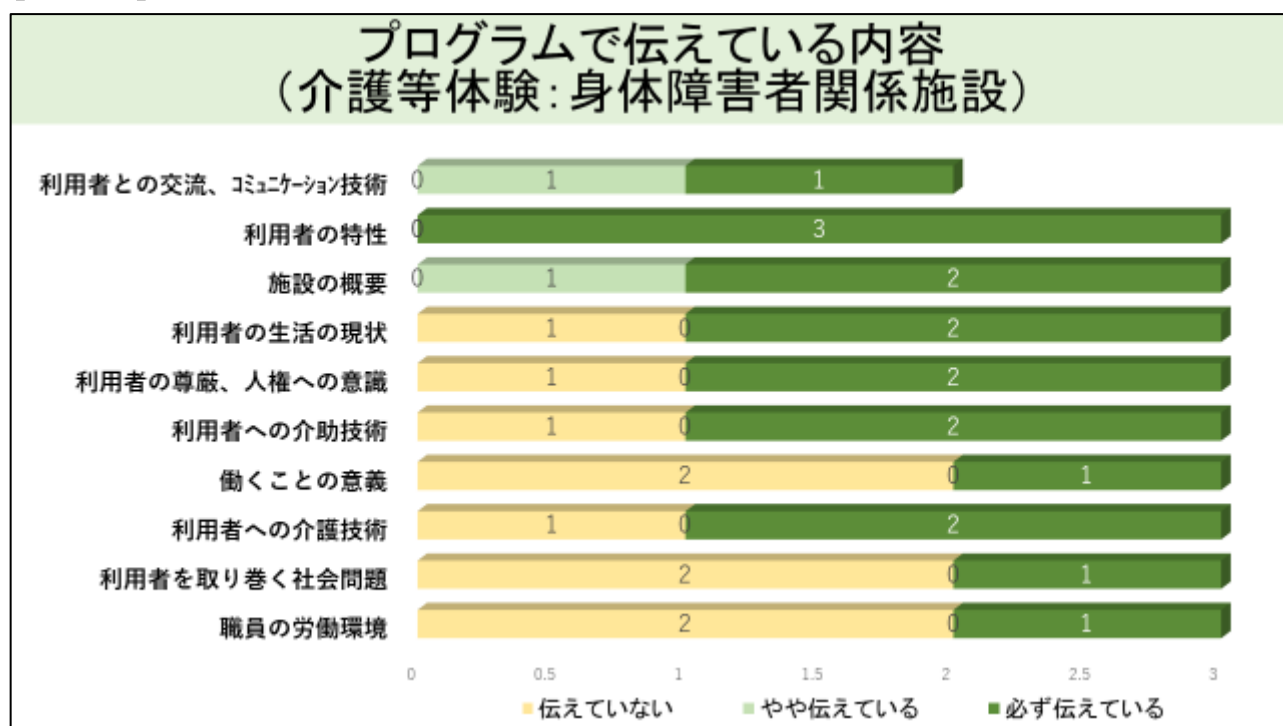
また、児童福祉関係施設（保育所を除く）は、回答施設が少ないため、参考に取り上げると「必ず伝えている」内容として、最も多かったものは「施設の概要」であり、高齢者関係施設、知的障害者関係施設と同じでしたが、次いで多かったのは「働くことの意義」であり、また「職場の労働環境」についても他に比べると多くなっていました。

（図39、図40、図41、図42、図43）

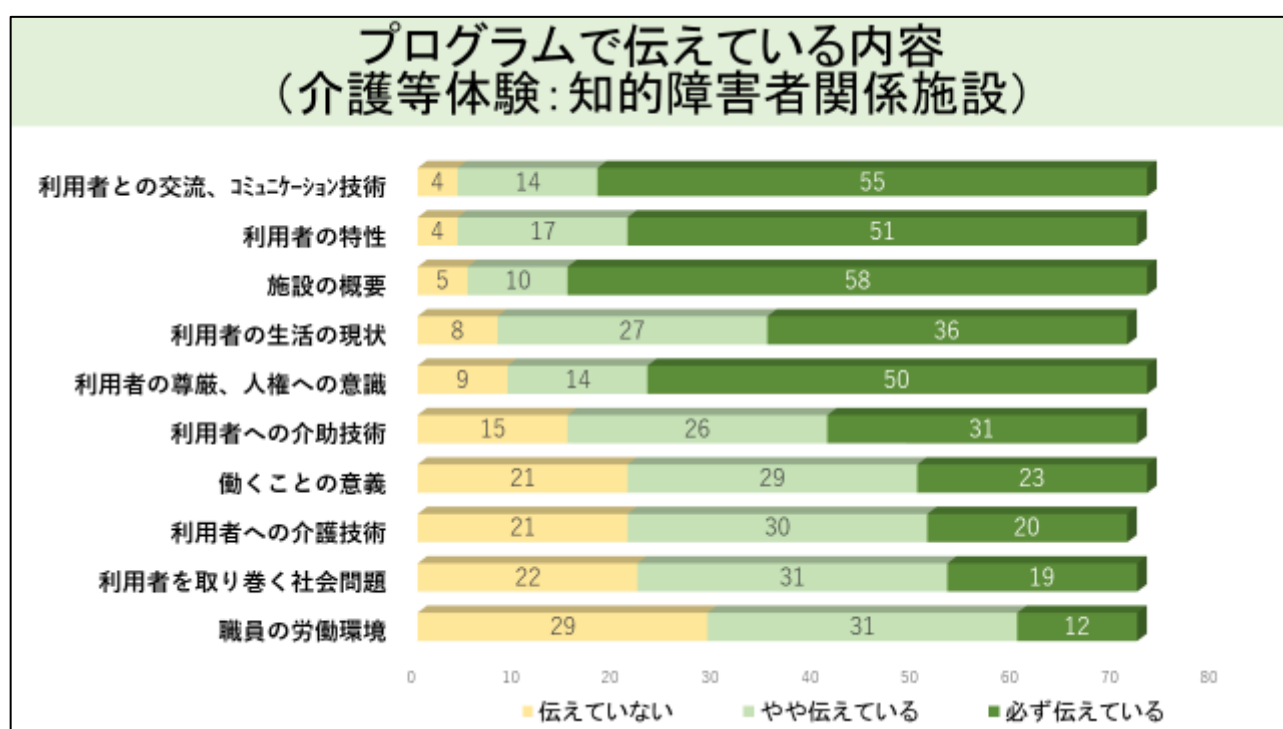
【図39】



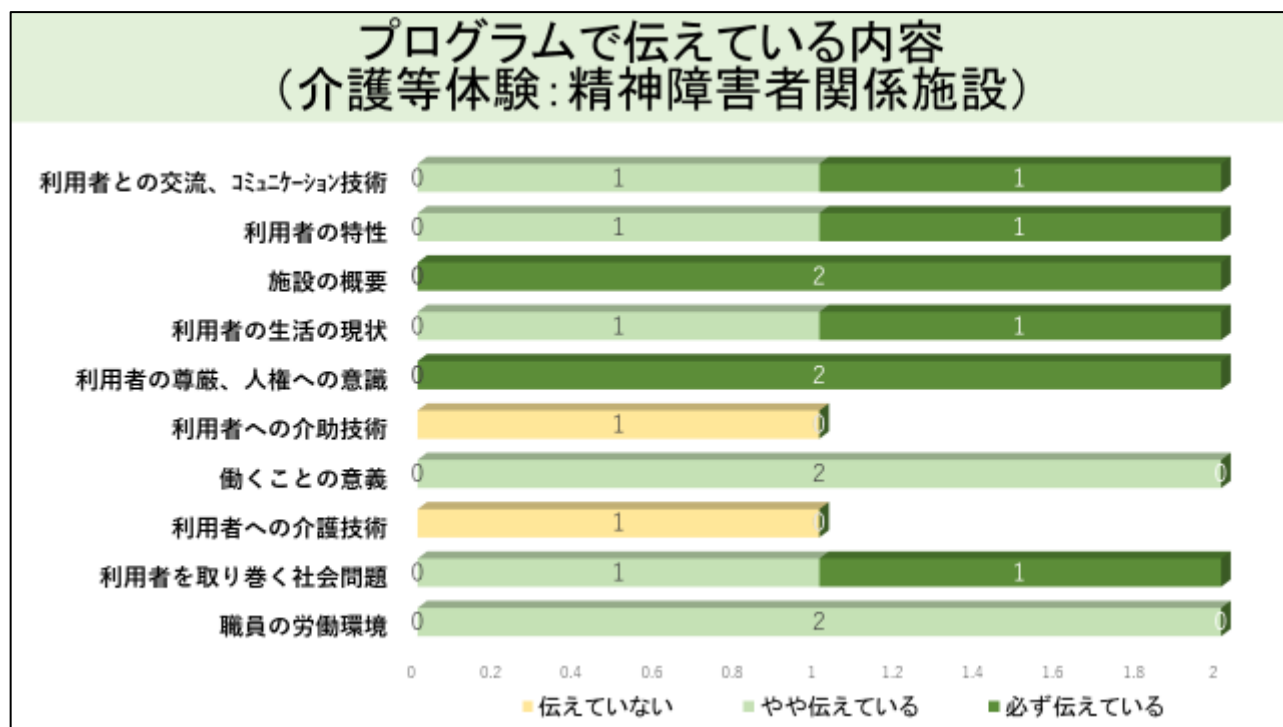
【 図 4 0 】



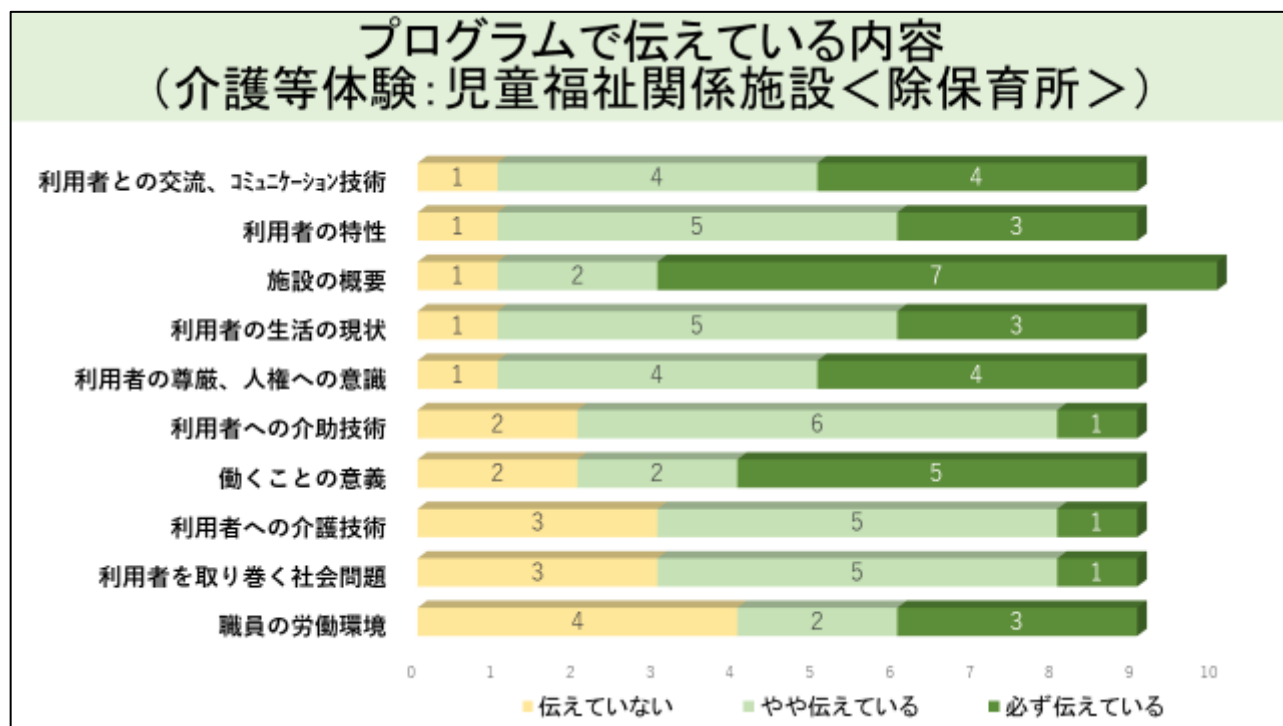
【 図 4 1 】



【 図 4 2 】



【 図 4 3 】

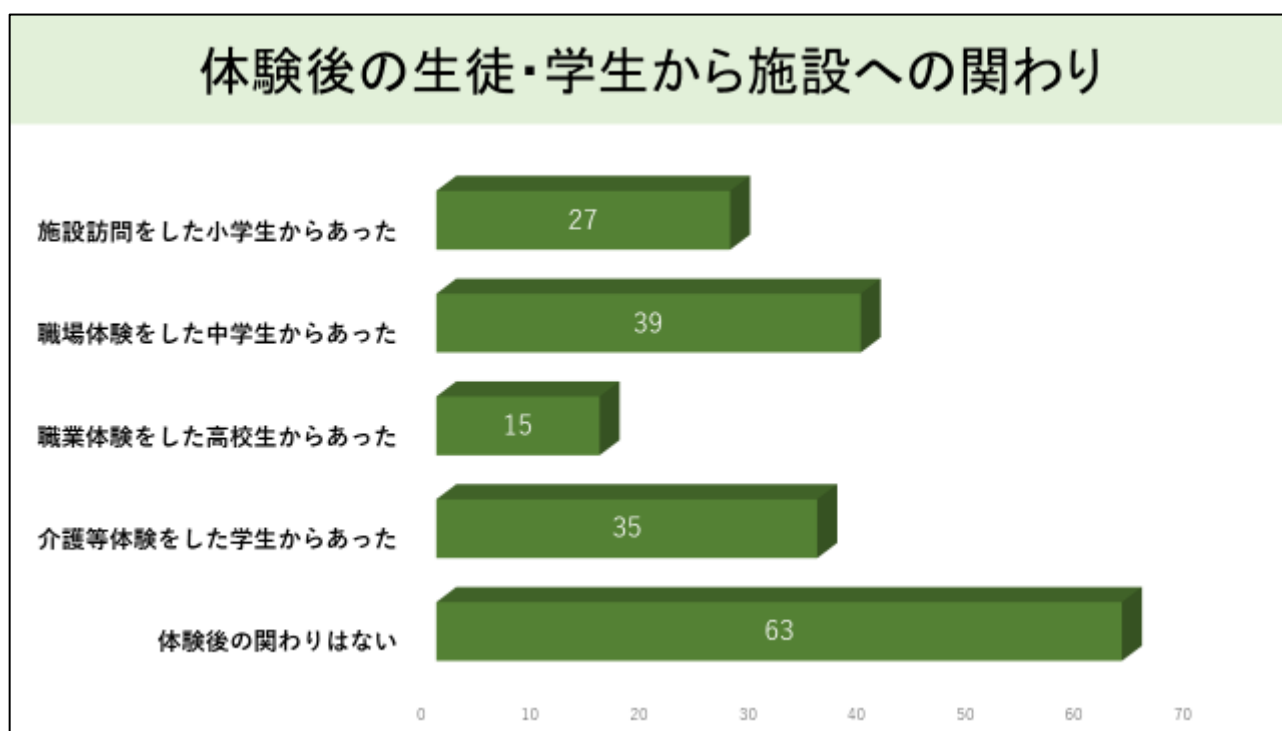


【体験後の生徒・学生から施設への関わり】

最も多く関わりがあったのは、「職場体験をした中学生」からであり、次いで「介護等体験をした学生」、「施設訪問をした小学生」であり、「職業体験をした高校生」は、他に比べると少ない状況でした。

ただ全体としては、「体験後の関わりはない」が多い状況となっています。（図４４）

【図４４】



利用者の有する力や尊厳について伝えるために工夫していること

- 認知症の方への言葉使い
- 介護の果たすべき役割と利用者に接する際人生の大先輩である事を念頭に接する事を伝えている。
- 年齢に応じて難しい言葉を分かりやすく説明。また、自分のおじいちゃん、おばあちゃんに例えてもらったりしている。
- お互いが困っている場面毎に当該サービス職員が一緒に対応し、お互いが気持ちよく過ごせる配慮をしている。
- 各々の年齢等を配慮し、言葉を使い分け分かりやすく説明する。
- 私たちと何ら変わらないことを特に伝えている。恐れることはないことが伝わればと考えている。
- 秘密保持の原則を守れる範囲で、利用者個人の背景やADLをお知らせし、人として尊厳・尊敬する気持ちや距離感を生み出せるように工夫する。
- 資料を渡し、よく読んでもらうと共に、質疑を多く取る。
- 仕事の経験の多い者が関わる
- 一緒に作業や食事をする等、直接利用者の方と交流している際に伝えています。
- ありのままの姿にふれてもらって、自分で感じることを大切にしている。実際に会う前と後とでは違う見方になっている。
- 施設運営がキリスト教主義で行われているため、聖書から福祉の意義を
- 「人の価値について、人格等について」「人を看ることの意義」を中心に伝え、あとは基本的な介護アドバイス程度
- 事例を基に分かりやすく説明する。
- 当法人の理念である「愛と感謝と奉仕」の元、利用者の人格と人間性を尊重することを伝えている。
- 自立支援の考え方を日常生活の場面を例に分かりやすく説明をしている。
- ご入居者の個人情報、施設の外では話さないよう伝えています。ご年配者なので、丁寧な言葉遣い、態度で接するようお願いしています。
- いつも自分がケアされる立場だったらどうかと常に意識していただけるように例を出しながら説明する。
- 支援であるということの説明。認知症の特性の説明。
- 目上の方へ対する言葉使い等、介護も接客業に通ずることを必ず伝えています。認知症の方とのコミュニケーションを体験中1回は図ってもらうよう意識しています。
- 一緒に活動する利用者の方の得意なことや自信をもって行っている活動を見てもらったり、詳しく説明する。そのことを体験してもらう。
- 基本方針や職員の心得を各セクションに掲げて、いつでも確認できるようにしている。
- 利用者さんの尊厳は大切なことであるが、職員ができる範囲内、皆平等に接することが出来る介助をしましょうと伝えています。
- 利用者に関わる時間を多くしています。
- 言葉だけではなく目で見て理解できるよう資料を準備する。
- 利用者の方が暮らしたい場所、思いを大事にする中で、出来る時は一緒に声がけをし、話を聞くようにしている。

- 利用者の立場に自分を置き換えて考えるように伝えている。利用者本人に出来ることは行っていない、介助者はあくまでも出来ないこと、難しいことについてお手伝いをする事であると伝えている。
- 目上の人を敬うことを忘れずに対応すること。介助する。
- レクリエーション(スポーツや音楽)と一緒に楽しんでいただくことで気持ちのバリアフリーを感じてもらえればと思っています。(短時間なので深いところまでは難しいかと)
- ボランティア開始前に資料を配り、利用者さんの対応について説明を行っている。
- 実習の際に、利用されている方のそれまでの人生に対する尊重、尊敬の念を持つよう、人生の先輩であることは伝えています。(障害の有無でなく)
- 生徒にも分かりやすいような簡単な言葉を選んだり、“学校で言うと～”などと例えを入れながらイメージしやすいようにしている。
- 当たり前ですが、利用者様に敬語は徹底しています。
- 施設の理念や福祉職員としての心得を伝えている。
- 実際に観る、あるいは行ってみる事もあります。
- 得意なこと苦手なこととして、自分たちと何ら変わらないことから伝え、先入観を持たずに捉えられるようにしています。
- 利用者とコミュニケーションをとってもらいその後解説している。
- 自分たちの生活や身体と比べて…など体験に来た方が分かるような言葉を使うようにしている。
- 職場体験であり、福祉を目指していない学生さん多いので、内容が軽い物でないと伝わらないこともあり、やんわりと「自分のできる事を奪わない」と話し、利用者様の日常を見ていただく。
- 認知症の利用者様が多いので、実践にて見ていただいております。
- 障害特性を理解してもらうために参考資料を渡し、一緒に読み合わせしながら説明している。
- 日々反省会を通して情報交換、情報共有を図っている。
- 独自に作成した資料を用い、オリエンテーションを2回に分けて時間を設けて実施している。
- 利用者の方への理解を深めてもらうため、体験中の課題を日々設定。特にコミュニケーションへの意識に留意する様工夫している。また、虐待防止法や差別解消法等の話を交えながら「尊厳」についての理解も深められるようにしています。
- 実際に利用者の方と同じ作業を行ってもらい、利用者の方の力を実感してもらう。コミュニケーションを多く図れるよう、職員が利用者との間をとりもつようにしている。言葉遣いや態度についてはオリエンテーション時に伝え、不適切な行動等が見られたらその都度伝えている。
- 残っている能力を伝えています。また、治具も重要な活動の一部と考えています。
障害の重たさと日常生活の説明、そして実際に利用者の生活状況を見ていただき、年齢に応じた言葉遣いや対応について必ず話をしています。
- 日中活動において利用者の興味のあるものを提示し道具も用いることにより、利用者が自ら主体的に行っていけるよう取り組んでいます。また、活動に気持ちが向かない利用者に対しては、コミュニケーションを取っていく中で音楽を聴いたり、外へ出かけたりすることにより、リラックスすることのできる機会を作り、活動へと気持ちを向けられるよう支援を行っています。
- 利用者の呼称は必ず「〇〇さん」と呼ぶこと。それぞれの利用者により差はあるが、本人の出来ることはなるべく本人の力で行ってもらう。
- 利用者のできる事等を随時、小学生に話をしている。

- 認知症の病気の事と関わり、人生の先輩としての高齢者
- 声かけや身の振る舞い
- 作業に関しては、利用者が指導者となり学生に教える。ユーモアを交えて丁寧に教えてくださるので、中学生には障害のある人のイメージがずいぶん変わるようです。作業内容がアパート清掃管理業務やシイタケ、きくらげ栽培なこともイメージアップに繋がっていると思います。
- 事前に行うオリエンテーションの際に、認知症についての理解を深めるようにしている。
- 専門用語を使用せず小中学生に分かり易い説明を実施しています。また、自身の日常生活に置き換える事で説明しています。
- 受入れの際の講義での利用者の尊厳を分かり易く話すことや利用者の対応を通じてのケースワークで伝える工夫をしています。
- 利用者一人一人生き立ちや考え方が違うので、個人に合わせたケアを実践するよう話す。特に認知症への接し方について。
- 自己肯定感の高揚について譲る、認める、愛することが必要であることを絶えず伝える様にしている。
- プライバシーに配慮しながら生活歴を一部伝えている。
- 意志確認の重要性について。
- 障害の有無ということではなく、感覚ややりにくさを伝えるようにする。
- 相手の立場に立つ
- 自らの力を保持できるように自分で向上心を持っていただけるように、自分の力で出来るレク等を行うようにしている。
- 体験等の初日にオリエンテーションを実施。その際に利用者の特性や守秘義務などを伝えている。
- オリエンテーションを通じて、介護の基本を伝えている。
- 利用者の作業を通し、現状、最初はどの程度できたのか、ここまで到達するために要した期間を説明し、個々が持つ力に着目して支援を行うことを伝えるようにしている。
- 言葉遣いでタメ口にならない様に伝える。出来る事は本人に行っていただき、出来ない事を介助する。
- 出来なくなってきた事と出来る事の具体例をあげ話すようにしている。
- まずは、障害者が暴れる、危害を加える心配があるという差別・偏見イメージを取り除くこと。普通の生活を望む一般市民であり、ただ生活上・健康上に特別な配慮を必要としていることを伝えていきます。
- 子どもの権利擁護についての説明。望ましい行動を褒めるペアレント・トレーニングについて教えている。
- カンファレンスの際には、ご利用者が自分でできることは自分でやらせようようにということを必ず伝えている。
- ユニットケア(個別ケア)の重要性。看取り介護を実践しているので、その内容をお話しする。
- 実際、関わりをもつ前に十分説明すること。(どういった施設で、どのような状況の方が利用しているのか等)
- 認知症のあるご利用者の行動特性などを話し、それに対して職員はどのように関わっていくかを説明する。
- 具体的に指示。(着替えの場所は人から見えない所でとか、タバコを吸いたい利用者に吸う場所を提示)

- オリエンテーションにて、この施設の特徴や入居者のニーズについてできる限り説明する。
- 職場体験に入る前に事前課題として「高齢者の特徴」「尊厳って何」を様式に書いてきてもらい、一日目の朝子ども達と話し合いをし、体験をスタートしています。
- 「施設入居者」や「介護対象者」という視点ではなく、今日の前にいらっしゃる方々が歩んできた道程や担ってきた役割などを説明した後に、私達がそのように考え、接していくべきかを理解してもらえるように工夫しています。
- まずは、福祉に興味を持ってもらうことが大切と考え、楽しい時間を過ごしていただくよう、難しい話はあえてしない。
- 特定の利用者さんに着目し、作業と一緒にいることを通して、利用者さんの理解が深まるよう工夫しています。
- 特性を伝えていく際に、得意な部分も伝えていく。支援とは、してあげることではなく、足りない所をお手伝いするのだということを伝える。レクリエーション(フライングディスク等)と一緒にいる。
- 実際に利用者として特性やコミュニケーション方法等伝え、併せてどのような人なのか個々で異なるのでその時々お話しするようにしている。
- 目の前にいる利用者が「もしも自分だったら」どのようにしてほしいか等を考えてもらう。
- 児童一人ひとりの「困り感」の具体的な状況、発達支援や家族支援の重要性(個々の子、家族に応じ支援)について、実習オリエンテーションで伝えている。
- 本人のストレングスを見出して、それを活かす取り組みを個別支援計画に記載して実施している。また、本人の意思決定に基づく支援が出来るようにしている。
- 利用者の方と一緒に仕事をしたり、支援計画を考えるプロセスを通してストレングスや当たり前にも暮らすということを考えてもらっています。
- コミュニケーションの取り方や認知症高齢者との関わりについて
- 車椅子の構造、部位の名称のプリントを配り、実際に車椅子に乗って体験をしている。高齢者になったつもりの疑似体験もしている。接し方や話し方の中で、最低限の約束事として、敬意を持って丁寧に接するように伝えている。



施設として受け入れする上で課題と感じていること

【小学生の施設訪問】

- 大人数に対する伝え方
- 長い時間同じような事をするとう飽きてしまう(間に体験等を入れている)
- 高齢者(利用者)の病気や特性の理解
- 介護について専門用語を使わずに分かりやすく教えるにはどうすべきか。
- 心の病気について、どの程度知っているかなと思いますが、特に問題はありません。
- 理解が難しい。
- 児童の入所施設であり、プライバシー保護等の観点から若年層の受け入れはしていない。
- ノンバーバル・コミュニケーションに関して伝えきれないことが多い。
- 精神障害者を理解するためには難しい年齢であると思われる。
- 入所児の年齢発達を守るため受け入れが難しい。
- 重度の知的障害者入所施設(成人)なので、ショックを受けてしまうと思われ受け入れは早いと考えています。
- 利用者の負担にならないように
- 学校の教師のお年寄りや老いに対する理解不足。
- 感染症の流行期の受け入れ(インフル、ノロウィルス等)
- 職員の介入がないと、なかなか利用者とコミュニケーションがとれず何をして良いか分からない状況となってしまうことがある。
- 職業体験としてもですが、これからの成長への糧に少しでもなればと思います。
- 分かりやすい言葉に置き換えて話すこと。高齢者の身体的、精神的な特徴を理解した上での体験
- 実習等の意味が理解できておらず、やんちゃな様子が見られます。
- 例年、秋から冬にかけてインフルエンザ、ノロウィルス等の感染症が流行します。高齢者施設ということもあり、この期間の受け入れが難しいため、春から夏にかけてのみ受け入れが集中しがちになってしまうことです。
- 利用者との体験差があり、活動が活発な方に対しうちとけてもらうために、職員体制が不十分。
- 安全面
- 職業として伝えるのは難しい。
- 訪問する子ども達も利用者様にも楽しい一時を過ごしていただく。
- 利用者が高齢なので、触れ合いが難しいかと思われる。
- 介護現場に興味を持つためのプログラム作り
- 事前の打ち合わせが出来ていれば問題ない。
- 精神保健福祉士の実習以外での受け入れはほとんど実績がありませんが、小学生が今年度施設訪問に来られました。なかなか理解できない様子でした。
- 分かりやすい言葉、身近な言い回しに替えて伝えている(専門用語等)
- 人との交流を元気に明るく楽しんでほしいことを伝えています。
- 介助、介護の説明はするが直接身体にふれることなどは危険がともなうこともあり、あまり参加していただけないことがある。

- どこまで介入したらよいのか学生との距離
- 作業してもらおうとそれに集中しすぎて利用者を見ない。
- 会話が続かない、出来ないなど、どんな事を話そうか決めてある必要もあるかもしれないです。
- コミュニケーションをどう広げ、関わっていけるか。
- 障害の状態から何をして良いか分からないと思います。
- 小学生は各々の発表をこなすことで精一杯になりがちであり、時間のゆとりがない。
- 積極的にコミュニケーションが図れないこともある。小中高校生にどこまで体験してもらって良いのか？入浴介助を教えても良いか？コミュニケーションやレクリエーション等の限られた体験です。
- 興味を持って施設に出向いてほしい。
- マンツーマン(介護職員と受入れ中学生)での対応が出来るシステム作り
- 当該施設の子ども達も通学している同じ学校の職場訪問になるので、その説明に苦慮している。
- 障害者支援、理念ということへの理解が進まない。
- 発達障害の対応の難しさ、どう分かり易く説明できるかが課題
- 学区内の一施設としての理解にウエイトを置くが、理解度は？？？
- 全体的に受け入れする際に行う内容を各年齢層毎にどのように分けるのか。また、それを行う担当者の質にバラツキが出るのが課題となっている。
- コミュニケーションの取りにくい方との対応に戸惑って近づいていけないこと。
- 同年代の子の生活の場としての施設なので、子ども達の気持ちを考えると難しい
- 実績なしだが、高齢者とのふれあいを楽しいと感じられる工夫が必要(ゲーム等)
- 入居者とのコミュニケーションの方法について
- 社会経験が少なく、障害者の方々が働く場として認識しづらい。
- 具体的に障害のある方や認知症のある方への理解が乏しく、相手を傷つけるような言動をする場合もある。そこで学びをうることも大事だが、ご利用者はそのために存在しているのではないので、事前教育にも配慮が必要と感じている。
- 相性がある。
- 施設で小・中・高校生は生活しているので近い(同じ)年齢、立場の方たちは受け入れていません。
- 道徳教育の不足
- 受入れの人数が多く(一斉に1クラス、2クラスみえるので)、さばききれない時があり、また、説明にもムラが出来てしまう。
- 内容が大人によって計画されすぎており、子ども本来のエネルギーある関りが持ちにくい印象。
- 年代毎の説明内容
- 現在受け入れていない(要請がない)ため、総合学習に役立ててほしいと思っている。
- 若すぎる
- 若い方なので、重度の知的障害者や発達障害者に関して何の知識もなかったり、性的なショック、他害等を受けないように事前に本人、保護者、学校等に説明をした上で受け入れている。説明をすると、やはりリスクがあるので受け入れが難しい。
- 1校のみ、短時間なので特に課題なし。
- 高齢者とスムーズにコミュニケーションが図れるように、出来れば間に入って対応したいが他者の対応もあり、なかなか一緒にコミュニケーションを図る時間が設けられない。

施設として受け入れする上で課題と感じていること

【中学生の職場体験】

- コミュニケーション能力のない方との関わり方
- 毎回、真面目に取り組んでいただけるので問題等は感じていません。
- 一人ひとり丁寧に教えている時間をとる事
- 長い時間同じような事をすると飽きてしまう(間に体験等を入れている)
- 介護の仕事について「大変な仕事」というイメージの方が多い。
- 現場で見学時間が多いので、中学生が長く感じている様子。
- 中二病とか言葉が先にありますが関わることで互いを理解している様なので特に問題ありません。
- 施設や介護への興味や関心を少しでも継続できるようにすること。
- 人間的な成長
- 理解が難しい
- 学生ボラは親が参加させるため、時間をかけないと福祉を理解してもらえない。若い方は楽しいと感じると凄く良く動いてくれたり、話しをしたりするので、そこまでが時間かかる。
- 児童の入所施設であり、プライバシー保護等の観点から若年層の受け入れはしていない
- ノンバーバル・コミュニケーションに関して伝えきれないことが多い。
- 入所児の年齢発達を守るため受け入れが難しい。
- 難しい年ごろなので、利用者への接し方についての伝え方。
- 重度の知的障害者入所施設(成人)なので、ショックを受けてしまうと思われ受け入れは早いと考えています。
- 学校の教師のお年寄りや老いに対する理解不足。
- 職業体験としてもですが、これからの成長への糧に少しでもなればと思います。
- 体験の将来への持続性
- マンパワーに余裕のない中指導するにあたり、負担感があります。
- 何のために体験しに来ているのか理解し、自覚している子が少ない。積極的に学ぼう、体験しようという姿勢を引き出すこと。
- 実習等の意味が理解できておらず、やんちゃな様子が見られます。
- 雪等の天候変更での対応。職場体験終了して約3時間経過しても帰れない時があった。
- 例年、秋から冬にかけてインフルエンザ、ノロウイルス等の感染症が流行します。高齢者施設ということもあり、この期間の受け入れが難しいため、春から夏にかけてのみ受け入れが集中しがちになってしまうことです。
- 積極的にコミュニケーションをとらない。
- 福祉に興味がない学生さんの職場体験時の消極性。
- 遊びの中での体験になっていることが多い。
- 安全面
- 社会体験で来ているが、自分が望んできた分野でないため積極性がない事がある。
- 初めての場でもあるので、少し消極的になってしまう所がある。いつもと変わらぬ元気を利用者さんへ見せてほしい。

- 高齢者への理解とある程度、学んでから参加していただきたい。
- 福祉は生活に身近なものであることは必ず伝えたいと思います。
- 利用者との距離の取り方、コミュニケーションの図り方をどのように理解してもらうかが課題となっている。
- コミュニケーションのとり方や楽しい一時を過ごしてほしい。
- 介護的体験は難しいので、レクリエーション補助をお願いしているが中学生の方のやりたいことも聞いていきたい。
- 介護現場に興味を持つためのプログラム作り
- 緊張しているためか、声が小さくなってしまう中学生がいるので、緊張をほぐし大きく声を出せるよう促す。
- 利用者と話をすることを苦手としている生徒さんが多いと感じる。「作業を手伝いに来ている」という雰囲気になりがちになる。
- 分かりやすい言葉、身近な言い回しに替えて伝えている(専門用語等)
- 理想と現実をどう伝達するか。希望は持たせたいが、実際の現場は難しい。
- 人との交流を元気に明るく楽しんでほしいことを伝えています。
- 人手不足により実際の現場で説明しながら対応することが難しく、一緒に関われる時間が限られてしまう。
- 取り組みの程度が難しい。
- どこまで介入したらよいのか学生との距離
- 介助、介護の説明はするが直接身体にふれることなどは危険がともなうこともあり、あまり参加していただけないことがある。
- 感染(カゼ等)についての意識が低く、体調で我慢、無理をすることがある。慣れない環境での不和。
- 地域としての繋がりを持つこと。施設及び知的障害者について正しく理解してもらうこと
- 希望外であるものの学校側の調整で当施設が実習先となった生徒の、興味関心やモチベーションの引き上げ方が難しく課題である。
- 時折ひどくやる気のない生徒がやって来る。
- 複数人での受け入れ時、同級生がいることに対し、悪い意味での「慣れ」が生じてしまわない様、対応に注意している。
- 会話が続かない、出来ないなど、どんな事を話そうか決めてある必要もあるかもしれないです。
- コミュニケーションをどう広げ、関わっていけるか。
- 自発的に動き、活動の意味を理解し、行動するにはどうしたら良いか。
- 中高時代にイジメ等の体験のある利用者が少なからずおり、ジャージ姿を見るのも辛いという人がいます。日時をしっかりと伝え、バッティングしないよう配慮します。(結果、会っても大丈夫だった！という利用者もいました)
- 仲の良い子が組んでしまうと、おしゃべりしたりふざけてしまう事がある。小中高校生にどこまで体験してもらって良いのか？入浴介助を教えても良いか？コミュニケーションやレクリエーション等の限られた体験です。
- 事前に施設の特徴等を学習して来てほしい。
- マンツーマン(介護職員と受入れ小学生)での対応が出来るシステム作り
- 障害者支援、理念ということへの理解が進まない。

- 発達障害の対応の難しさ、どう分かり易く説明できるかが課題
- 直接介護のない施設なので、交流が難しい。
- 全体的に受け入れする際に行う内容を各年齢層毎にどのように分けるのか。また、それを行う担当者の質にバラツキが出るのが課題となっている。
- もう少し元気に活動してほしいです。
- 利用者との作業が大半になってしまい支援員側の視点を伝える機会が限られる。
- 受け入れを担当する現場の人員不足。
- 当該施設の場合、特別支援学級の生徒が社会資源の体験利用を主の目的として実習していますので、福祉教育とは目的が異なります。
- 同年代の子の生活の場としての施設なので、子ども達の気持ちを考えると難しい
- 不真面目。本当にこの業界に興味があって来ているのかと思ってしまう。
- 実績なしだが、コミュニケーションの取り方など関わりを伝えること
- 入居者とのコミュニケーションの方法について
- 具体的に障害のある方や認知症のある方への理解が乏しく、相手を傷つけるような言動をする場合もある。そこで学びをうることも大事だが、ご利用者はそのために存在しているのではないので、事前教育にも配慮が必要と感じている。
- 受入れが難しい生徒(能力、情緒面)を事前に教えてほしいが、人権、個人情報の問題で難しいのかもしれない。事前情報があれば配慮できる。
- 部活等があるため時間を作るのが大変。
- 施設で小学生、中学生、高校生は生活しているので近い(同じ)年齢、立場の方たちは受け入れていません
- 看取りをしている施設なので、亡くなっていく人が他利用者と一緒に生活していること。3 日間では時間が少なく無理がある。
- 道德教育の不足
- 生徒さん達、選択で職場体験されているため、第一希望で望んで来られる生徒ばかりではないこと。その時々によって話や課題は変えているが…
- 年代毎の説明内容
- 現在、体験を受け入れているが、日程が短い(2日間)ため、伝えきれないと思っている。
- 若すぎる
- コミュニケーションが苦手な中学生を体験の中で、どう学校の先生とフォローしていくのか？
- 若い方なので、重度の知的障害者や発達障害者に関して何の知識もなかったり、性的なショック、他害等を受けないように事前に本人、保護者、学校等に説明をした上で受け入れている。説明をすると、やはりリスクがあるので受け入れが難しい。
- 身辺自立している利用者なので、参加者の方が思うほど介護的な役割がなく、見守り、声かけなどが中心になるので、拍子抜けしていないか心配。
- 高齢者とスムーズにコミュニケーションが図れるように、出来れば間に入って対応したいが他者の対応もあり、なかなか一緒にコミュニケーションを図る時間が設けられない。

施設として受け入れする上で課題と感じていること

【高校生の職業体験】

- コミュニケーション能力のない方との関わり方
- 毎回、真面目に取り組んでいただけるので問題等は感じていません。
- 興味が無い学生は全く話を聞いていない。興味を持ってもらえる工夫が必要
- 介護を身近に感じていただくにはどうすべきか。
- 人間的な成長と相手を理解
- 理解が難しい
- 学生ボラは親が参加させるため、時間をかけないと福祉を理解してもらえない。若い方は楽しいと感じると凄く良く動いてくれたり、話をしたりするので、そこまでが時間かかる。ノンバーバル・コミュニケーションに関して伝えきれないことが多い。
- 入所児の年齢発達を守るため受け入れが難しい。
- 交流を持つことから受け入れたいが、なかなか来てもらえない
- 職業体験としてもですが、これからの成長への糧に少しでもなれと思います。
- 体験の将来への持続性
- マンパワーに余裕のない中指導するにあたり、負担感があります。
- 特になし(介護職資格を目指しているため真剣です)
- 例年、秋から冬にかけてインフルエンザ、ノロウイルス等の感染症が流行します。高齢者施設ということもあり、この期間の受け入れが難しいため、春から夏にかけてのみ受け入れが集中しがちになってしまうことです。
- 積極的にコミュニケーションをとらない。
- 障がい児に興味を持ち、希望(ボランティア等の)が出ても、成人の障がい者施設への希望が少なく関わりの魅力が伝わりにくい。
- 意欲
- ボランティアを遊びに思っている生徒があり、真剣さが感じられない。
- 言葉遣いやお年寄り対しての接し方
- 将来の仕事を見据えての訪問になると思われるので具体的な仕事について説明していきたい。
- 介護現場に興味を持つためのプログラム作り
- 高校生同士で集まってしまうことがあるので、配置をしっかりと決めておく。
- 専門用語等も交え、理念等を伝え、実践的な部分も希望を聞きながら行っている。
- 人との交流を元気に明るく楽しんでほしいことを伝えています。
- 自身の考えを口にすることが少ない方が多いため、理解の程度や満足度等が分かりづらい。
- どこまで介入したらよいのか学生との距離
- 興味をもってもらうためにどのように関わっていくことが必要かを教えている。
- 様々な体験を限られた時間内でできるだけ多く取得する。
- 説明をする上で生徒の知識と経験を踏まえる事
- 会話が続かない、出来ないなど、どんな事を話そうか決めてある必要もあるかもしれないです。
- コミュニケーションをどう広げ、関わっていけるか。

- 自発的に動き、活動の意味を理解し、行動するにはどうしたら良いか。
- 中高時代にイジメ等の体験のある利用者が少なからずおり、ジャージ姿を見るのも辛いという人がいます。日時をしっかりと伝え、バッティングしないよう配慮します。(結果、会っても大丈夫だった！という利用者もいました)
- 就労体験の日数が5日間なので、長く時間が余ってしまう。小中高校生にどこまで体験してもらって良いのか？入浴介助を教えても良いか？コミュニケーションやレクリエーション等の限られた体験です。
- 介護職への就業意識や就職意欲を醸成する体験システム作り
- 障害者支援、理念ということへの理解が進まない。
- 発達障害の対応の難しさ、どう分かり易く説明できるかが課題
- 体験を通じて、実際に雇用へとなかなか繋がっていかない。
- 全体的に受け入れする際に行う内容を各年齢層毎にどのように分けるのか。また、それを行う担当者の質にバラツキが出ることが課題となっていり。
- 同年代の子の生活の場としての施設なので、子ども達の気持ちを考えると難しい
- より具体的に施設の在り方など説明し、お年寄りの気持ちを考えてもらうこと。
- 入居者とのコミュニケーションの方法について
- 中学生と同じようなプログラムでは、発達段階から難しいのでは。既にアルバイト等で職業体験をしているので、もっと専門性をもった体験プログラムが必要かも。
- 部活等があるため時間を作るのが大変。
- 施設で小学生、中学生、高校生は生活しているので近い(同じ)年齢、立場の方たちは受け入れていません
- 年代毎の説明内容
- 特支学校の受け入れは多いが、高校生のボランティア、実習は少ない。
- 若すぎる
- 若い方なので、重度の知的障害者や発達障害者に関して何の知識もなかったり、性的なショック、他害等を受けないように事前に本人、保護者、学校等に説明をした上で受け入れている。説明をすると、やはりリスクがあるので受け入れが難しい。
- 高齢者とスムーズにコミュニケーションが図れるように、出来れば間に入って対応したいが他者の対応もあり、なかなか一緒にコミュニケーションを図る時間が設けられない。

施設として受け入れする上で課題と感じていること

【大学生の介護等体験】

- コミュニケーション能力のない方との関わり方
- 毎回、真面目に取り組んでいただけるので問題等は感じていません。
- 自分の判断で勝手に介助をしてしまう方が以前いた。
- 介護の楽しいところ、大変なところを知っていただくには、どんな体験をしていただくべきか。
- 他職種就労で仕事に従事しており、施設を知らない方々に、いかに知ってもらおうか悩む。前向きに活動したい。いずれは関わりたいと思ってもらえるかどうか気にしている。
- 仕事の意味、専門性の大切さ
- 可能な限り資料と実態の説明
- ノンバーバル・コミュニケーションに関して伝えきれないことが多い。
- 向いている人とそうでない人がいること。
- 一人ひとりの体験に向き合う姿勢が全く違う。
- 福祉の現場の現状を正確に伝えてもらえるように体験してもらいたいです。
- 体験の教育への活かし方
- 特になし(教職員資格を目指しているため真剣です)
- 例年、秋から冬にかけてインフルエンザ、ノロウイルス等の感染症が流行します。高齢者施設ということもあり、この期間の受け入れが難しいため、春から夏にかけてのみ受け入れが集中しがちになってしまうことです。
- 積極的にコミュニケーションをとらない。
- 限られた時間の中でどこまで施設や高齢者の現状を伝えられるか。
- 多様性を受け入れることが困難な学生に、リフレーミングの芽を感じてもらうこと。
- 事前訪問等してもらってオリエンテーションをしているのですが、学生さんの意欲があまりみられない。
- 意欲と社会性
- 全てに言えることですが、プライバシーを守ることについて、どこまで徹底できているか確認する方法がないこと。
- 言葉遣いやお年寄り対しての接し方
- 介護職員が担当した際に、指導についての職員によって介助に入る準備が異なる場合がある。例えば、ベッドを上下させる。ベッド柵の取りはずしなど手間をかける職員とかけない職員がいる。
- デイサービスの利用をされ利用者さんに何が支援とされているのか伝えること。
- 教育職員の中には関心の薄い方も多く、プログラムの一つとして義務的に考える方も多い。良い体験にしていきたい。
- 介護現場に興味を持つためのプログラム作り
- 学習意欲の差をどう埋めるべきか(どう対応するべきか)
- 受け身の方が多いので、積極的になって欲しい。
- 人手不足により実際の現場で説明しながら対応することが難しく、一緒に関われる時間が限られてしまう。

- 専門用語等も交え、理念等を伝え、実践的な部分も希望を聞きながら行っている。
- 教育に「支援」が入ったが、福祉と教育の観点の違いも感じるためどのような体験が効果的なのか悩む。
- 体験に来た方に目的や目標がないと困ることがある。
- 今後、介護に携わらないと考えられる方は、あまり率先して関ることがなく、人により温度差を感じています。
- 様々な体験を限られた時間内でできるだけ多く取得する。
- 目的意識や課題意識に個人差が大きくあり、学校側の事前学習の内容、あり方によってもそれが左右されてしまうこともあるので課題である。
- 学生毎で経験の積み上げ方「福祉」に対する考え方に差が生じるため、意見も聞き取りながら最適な体験となるよう留意している。
- 日数が短いことが多く、体験が偏りがち。
- どの程度までの体験をしてもらえば良いのか悩む。(具体的な体験の目安を示してほしい。学生にもそれを伝えてほしい)
- 現在、日中活動時の職員人数が減少したため、朝の受け入れ職員がいないので介護体験実習時間を9時30分～15時30分と短縮して実施しています。また、職員人数が少ないことにより、実習生に対して利用者とのコミュニケーション方法等伝える時間が多く持てない現状があります。
- 学校の教員となるための1課程として捉えているのか、あまり福祉や利用者への関心がないように思われた。
- 会話が続かない、出来ないなど、どんな事を話そうか決めてある必要もあるかもしれないです。
- コミュニケーションをどう広げ、関わっていけるか。楽しく活動している方や義務的にやっている方がいるように思います。自ら望んでボランティア体験しているか疑問を感じる体験者がいます。
- 実習生の生活感
- 介護していただく場面を用意できないので受けづらい。
- 就業に直結する体験システム作り
- どうしても「大変さ」ばかりが伝わってしまう。
- 発達障害の対応の難しさ、どう分かり易く説明できるかが課題
- 体験を通じて、実際に雇用へとなかなか繋がっていかない。
- 全体的に受け入れする際に行う内容を各年齢層毎にどのように分けるのか。また、それを行う担当者の質にバラツキが出ることが課題となっている。
- 逆に学ぶこともあります。
- 短期間で何を重点的に伝えればよいか。
- 忘れ物をする方が時々いる。最終日は特に言葉遣いがタメロになってしまう。
- 行事の際に受け入れを行っているため、十分な介護体験の場の提供が行えているかということ。
- 中には自己紹介表や健康診断書の提出がない学生もいる。
- 実績なしだが、働くスタッフの思いを考えられるようなアプローチ
- どこまで、どう関わりを持つか
- 単に免許をとるためだけでは、あまり必要な体験ではないし、意義も感じられない。教員になるために、人間理解の場として体験を捉えてもらっている。
- 福祉分野で勉強をしているせいか意欲が見られる。
- 仕事をしている意味が理解していないものが来る。

- カリキュラムの一つとして考えられていて、大人な頭の割には考え方、課題への取り組み方が悪い。もっと自主性がほしいと思うし、将来の先生となる一助にしてなる体験の取り組み方をしてほしい。
- 対象の方々のビジョンが多々あるため、細分化する必要もあると考えています。
- 年代毎の説明内容
- 人によって
- 一度来てくれた方が、その後も繋がっていければよいと思う。
- 障害をもたれている方々と普段接する機会が少ないと思うので、まず壁が出来ないように。ただ時間だけが過ぎないようにことらからのアプローチも必要かと感じる。体験や実習ノートの記入事務が職員にとって負担(ノートの簡素化)
- 多くある必要項目を十分に実習内で学べるようにすることが難しい。ゴール設定が学生により異なってくるが、そこに対して丁寧に対応できない場合がある。
- 高齢者とスムーズにコミュニケーションが図れるように、出来れば間に入って対応したいが他者の対応もあり、なかなか一緒にコミュニケーションを図る時間が設けられない。



今後、若者を受け入れるに際して取り組んでみたいこと

- 認知症のある方でも普通に接することが出来るようにしたいと思います。
- 体験を通じてボランティア活動や就業のきっかけに繋がれば幸いです。
- 介護の楽しさを伝えたい。
- 高齢者体験キットを使用して体験してもらいたい。
- ご依頼があれば施設で介護について知っていただきたいので見学でもぜひ来ていただきたいです。昨年度は、大人の方のボランティアのみで学生さんはいらっしゃいませんでした。
- 季節のイベント毎に気軽に、定期的に足を運んでいただける仕組み等
- 1利用者となって時間を過ごしていただく事で、利用者の方の気持ち等々身をもって体験できるかなと思います。
- これまでもこれからも、何ら変わらない同じ人間なのだというメッセージを伝えてきたいです。偏見や差別が生まれないように自分たちにできることは受け入れることであると思っています。
- 職場体験用のガイドブックのようなものが必要かと考えている。
- 施設の情報を説明してもらいたい。
- イベントなどある日を施設に出してもらい、その日にできる限り参加してもらうようにしてほしい。
- 支援員の増加のために、高校生の受入れについては、今後検討していきたいと考えている(見学、説明会など)
- ボランティア募集のDMを学校へ配布。
- 施設単位での情報発信には限界がある。機関側の更なる積極的なアプローチを望みます。施設側としては受け入れを欲している。
- 近隣の方々や多くの人、様々な年齢の方々と関わりたい。
- 高齢者体験等
- 職員の体験ではなく、デイサービス1日体験(利用者の目線での体験)
- SNSの利用
- 現在、保育実習生の受け入れ、介護福祉士実習生の受け入れを行っています。保育実習生、介護福祉士実習生に対して、一日ごとに振り返りの時間を持っています。行事の際はボランティアとして来てくださっています。
- 現在、保育実習の学生は受け入れていましたが、今後(2)4. 5. 6の皆さんの受け入れも検討していきたいと思っています。
- 施設の地域向けへの行事(地域貢献活動)等と一緒に活動すること
- 時間が取れば利用者と共同で作品作りなど。
- レクリエーションや体操など経験していただき、一緒に過ごしていただき沢山のコミュニケーションをとってほしい。
- 介護職の現場をアピールできていない事が人財不足を生んでいるので、施設でのボランティアを3～7日続けて取り組む事で利用者の人柄、職員の仕事も少し分かって頂けて魅力を感じていただければと思います。教育の一環としてプログラムにして欲しい。
- 積極的な現場体験を組み込んでいきたい。
- レクリエーションの立案をお任せしたら新しいアイディアが出て良いのではないかとと思うが、当施設ではあまり現実的ではないと思う。

- 自主製品を一緒に作成
- レクリエーションを学生の方主体でやる時に、1日のみではなく何日かに分けて行えれば、利用者の方も喜ぶと思います。
- 体験後にも関わると良い。近隣であるため。
- 体験に対して不安、戸惑いを感じていることがあると思うので、職員とのコミュニケーションをより図れるように取り組んでいきたい。
- 体験後の学生の意見や他施設での良い取り組み事例等があれば、情報提供いただけると今後の受け入れの参考になるかと思う。
- 定期的なボランティアの受け入れを行っていく。
- 他の福祉施設同様、人材不足が大きな課題となっている。福祉の現場への就職についても関心を持っていただけるような実習としていきたい。
- 小学生の時に訪問したという高校生がインターンシップで来る予定である。以降も積極的に取り組んで行きたい。また、施設独自でボラカフェを開催している。ボランティアを通し、利用者との触れ合いや仕事内容等の理解が深められるように取り組んでいる。
- できるだけ多くの実習生を受け入れたい。
- 学生にもっとアピールしていくために、学校に施設の説明会に参加。
- 私共の事業所の利用者が働いている姿は本当にかっこいいので、たくさんの方に見てほしい。一方、病気の体験を語れる方もいるので、聞いてもらえる場面もセットしてみたい。
- 園芸レク等を利用者様と一緒にいき体験してもらおう。
- 受入れ前に各自で1つずつ課題を持ち、その課題に向け職場職員や利用者の意見を踏まえて検討会を行う。
- 福祉機器会社と協力して、ロボット等の介護先端技術を取り入れた体験をしてみたい。
- ボランティアは常に受け入れている体制はできております。が、遊び感情だけでなく生活に寄り添う気持ちを持った方を受け入れたいと思っております。
- イベントの案内。
- 定期的な受け入れ。イベントの案内。
- 介護の世界に興味を持ってもらえる努力が必要。
- 開設 2 年目の特養ですが、受入れ実績はありません。今後、受入れをしたいと思っておりますが、手段が分かりません。
- 受け入れをした最終日に必ず体験した後に施設へボランティアなど来たいかを聞いてみる。
- 若者がこの仕事に魅力を感じてもらえるよう、喜び体験を増やしたい。(人のためになっていると感じる体験)
- 基本的には断ることはしません。
- 社会的養護のやりがい伝えていく。
- 一日介護体験のような取り組みを夏休み、春休みで取り組んでみたい。
- 若い方に障害者に対する支援や取り組みを見てもらって、色々な事を感じてもらいたい。その後感じた事を今後の生活に活かしてもらいたい。
- まだ職場体験を受け入れたことがないので、今後受け入れたい。
- 実習した人が、施設で何を学べたのかフィードバックしてもらえると力になる。
- 幼少期より高齢者に対する知識や大切さを学ぶべきであり、今の段階ではあったとしても少なすぎる。夏冬休みを利用した泊り体験などあるとなお可。

- 「病院ではなく日常の生活をしている中で亡くなることは？」を話し合ってみたい。
- 介護や福祉のイメージが悪い方に偏るマスメディアの内容から誤解を含めて、良い人材確保等にも影響が出ています。夢や希望を持って働ける職種であることを広く伝えていきたいと思います。
- 行事へのボランティアとしての関わり強化
- 1日だけでなく、3日間くらいの体験プログラムが出来ると良いと思う。
- 一度の体験ではなく、資格を取るためだけではなく、何度も訪れてもらえるような関係を作れるようにしていきたい。
- 以前、ボランティアで大学のマジックサークルの学生さん達に来てもらいました。利用者さん達もとても喜ばれていたので今後も機会があればお願いしたいと思っています（マジック、劇、音楽等等々）
- 共同生活援助（GH）事業なので夜と朝の生活が中心であり、生徒●学生の年齢によっては受入れが難しい状況です
- 個人ボランティア体験をシステム化すること宣伝（ホームページ）することで、療育の魅力について知ってもらう機会をつくる。
- ボランティア等を受け入れはしているが、実際にしてみてショックを受けてしまう事が若い人にはあるので、施設で実習やボランティアをする際には利用者の方の障害特性をご理解の上に実施している。その上で、障害を持った方へのサポートするやりがい、楽しさを伝えています。
- 小中学生の職場体験を増やし、授業でも取り入れてほしい。

